
MUV-LUV ALTERNATIVE5 (改)

ポンポコ狸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MUV - LUV ALTERNATIVE 5 (改)

【Nコード】

N4277P

【作者名】

ポンポコ狸

【あらすじ】

MUV - LUV ALTERNATIVEに、宇宙移民に忌避感を持たない人間が来訪したらどうなるのか。

本来有り得たかも知れない道を外れた、未来はどこへ行くのか？

プロローグ

突然ですが、転生しました。

しかも、複数回もロボットアニメの世界を彷徨っています。

それも、リアル系の物ばかり。

要するに、シリアス100%・御都合主義絶無・ハッピーエンド
無し・超現実主義の、人と人の殺し合いの人生の連続です。

何が原因で、こんな事に成ったのかな？

積重なっ て行くのは、知識と経験・記憶と思い出・後悔と絶望、

そして人を殺し続けて真つ赤を通り越してドス黒く染まった手。

夢なら覚めてくれと何度思ったことか・・・。

記憶に残っている最初の人生は、何処にでも居るであろう極々平凡な大学生でした。

大学4年で卒業単位習得済み・就職内定済み・卒業研究発表を残すのみと成った、暇な時間が大いに存在する何処にでも居る大学生です。

まあ暇な時間を、リアルロボットアニメのマラソン鑑賞で潰す程度にはオタクでしたが。

転機を迎えたのは、卒研発表の前日です。

明日が発表と言う事も有り、気分転換がてらに愛車で近くの山間部を昼間からドライブしていました。

大学4年で走り慣れた道を、何時もの様に何時も通りに走行して異変が起きたのは、谷沿いの5連続ヘアピンカーブの半分を過ぎたところでした。

どっかの馬鹿が、タイムアタックの様な速度で道幅一杯にドリフトしながら突っ込んで来ました。

衝突回避の為に、咄嗟に互いが反対方向にハンドルを切って正面衝突は回避しました。

その代わりに、クルマごと谷底に向かってダイブしましたけど。

アンニヤろうが、今度有ったら戦場仕込みの拷問術をフルコースで喰らわせてやる。

まあ、そんなこんなで、それ以降は色々なロボットアニメの世界を旅しています。

大概が裏方の裏方、俗に言うシャドウワークス専門で。

何故か、原作主役組みとは滅多に顔合わせした事無いけどね。

因みに前回の世界は、マクロスF。

グレース女史の元、VF-27に乗ってギャラクシー側に付き、フロンティア勢に攻撃を加えていました。

サイボーグ体は初めてでしたが、高性能かつ便利な反面、メンテナンスが偉く大変でした。

そうそう、パイロットや職員としての腕は今までの技術や経験があるので超一流でしたよ。

お陰で、捨て駒には成らなくてすみました。

一緒にガリア4に來いとか言われた時は・・・終わった・・・とか思っちゃいましたよ。

最終決戦の時はバジュラクイーンと合体した、グレース女史の護衛に回りました。

結果はご存知のとおり、こっちの負け。

原作で、アルト中尉とブレラ少佐がコンビで突撃して無双するシーンがありましたよね？

あの中の一機が、自分です。

まあ、そんなこんなでマクロスF世界をログアウトしました。

ログアウトした筈なんですけどね。

「何でまだ、サイボーグ体でVF-27に乗ってるのかな自分？」

しかも、VF-27用試作デストロイドパック・対艦用大型反応弾・大型フォールド爆弾・スーパーフォールドブースター。

何、この超重装備。

星でも消滅させる気か？

マジで出来るぞ。

「それに、個々何処の世界だよ。マクロス世界な訳無いよな？あそこに見える地球っぽい惑星は、無防備過ぎるしな」

それに今までの転生は、赤ん坊の段階から始まって、前の世界の身体や装備の引き継ぎは一切無しがデフォルトだったのに。

・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・

第一話 この先どうしよう？（前書き）

お久しぶりです。

リアルが忙しく、執筆に時間が取れない時期が続いていました。

不定期更新になると思いますが、完結目指して頑張りますので改めてよろしく願います。

長期間放置していたので、プロローグ以外は改定して進めようと思います。

基本方針は変えないつもりです。

第一話 この先どうしよう？

取り合えず、地球の周りをステルスモードで周回しつつ地表及び太陽系内を索敵していると、とある事実が判明。

何か、気色の悪い生物が集団で地表を走破しながら、デストロイドっぽい人型兵器と戦闘をしていました。

「…………… M U V - L U V …… かな？」

つい、口からポロリと声が漏れました。

いや、まあ、あれですよ？

人間同士が表立って戦争してる所よりはマシですけど、何で双方殲滅戦を展開している世界なのかな？

あれですか、見えない何かに嫌われてるんですかね、俺？

特に悪い事をした覚えは……………うん、何でも無いですよ？

あれは仕事でしたことですし、あつちが勅命でしたし……。

「取り合えず、この先どうすつかな……？」

進入したネットワークを調べた結果、今は1980年1月だそう
だ。

まあ、時系列が分かった所でどうしようもない事なんだが。

Muv-Luvの大筋は何と無く覚えているが、詳細は忘れてし
まったしね。

たしか、2000年前後が本編として描かれていたと記憶してい
る。

「地球のBETAを殲滅するだけなら、特に難しい事は無いと思
うんだけど地球に穴が開くかな？」

マイクロミサイル型小型反応弾が100発以上、対艦大型反応弾
が2発、ディメンジョン・イーターDE弾が2発、地球ごと殲滅する事も出来る火力だ。

H1（ハイブ1）以外を潰した後に、集結したBETAを纏めて
DE弾で消し飛ばせば大丈夫かなと思うのだが、確実に地球に穴が
開く……と言うか、地球が決れる。

機体に搭載されているDE弾の効果範囲は約10000Km、ガ
リア4でグレース女史が使用したものと同じものである。

「それに、この体の維持も考えないと」

インプラント技術により強化されたこの身体は、定期的に専門のメンテナンスを受けなければ、フルパフォーマンスを発揮するのは極めて困難。

基本的にインプラントボディはメンテナンスフリーなのだが、それはあくまでも民生品を極一般的な使用範囲内で使用しての事だ。

戦闘目的の機装強化兵では、各部パーツの設計耐久限界を超える事例が間々ある為、一戦後毎には精密測定を行っている。

その上、自身の身体を構成しているパーツ群は、VF-27の性能をフルに発揮する為にフォールドクォーツ系物質が使用され強化した特別製。

この時代の技術力では、交換部品の再生産は極めて困難である。

「やっぱり、この世界でも結局はシャドウワークスか」

まともな方法では、この世界で生きていく事は不可能だろう。

ならば、まともでない方法で、生き抜くしかない。

幸か不幸か、この世界は地球外起源生物と戦争状態にあり、人類側は押されている。

更に、この敵性地球外起源生物は、ゼントラーディー軍やバジユ

ラ程の圧倒的な戦力は持っていない。

その上、地球人類側の勢力に統一勢力は無く、個別の勢力が内ゲバで対立していると言う有様。

「付け込む隙は幾らでもあるな・・・」

どこかの勢力に肩入れし、自身の持つ技術を部分開放する。

自身の持つ技術群は、此処の地球を襲っている地球外起源生物とは比べ物にならない程強大な敵と戦って培われて来た物。

再現性の難しくない技術でも、十分に強力な物を作る事は可能になる。

「放出する技術レベルを調整すれば、戦争を長引かせる事も可能だな」

又、戦争は技術発展を加速させる。

更に戦争、特に双方共に殲滅戦とは人的資源を極端に消費する。

そうになると、戦闘により身体損傷で優秀な兵士が戦線離脱する事は、大いに忌避すべき事態でもある。

そこに、本物と同等或いはそれ以上の性能を持った義肢や人工臓器が製造出来る様になったらどうだろう？

おそらく、民需軍需問わずに需要は発生するだろう。

技術の発展は人が必要と望むからこそ、発展するものだから。時間は掛かれど、いずれは自身の欲する部品も製造可能になるであらう。

そうする為にも、既存の擬態技術の方向性が自身の身体に使われているインプラント技術に辿り着く様に、基礎技術理論を公表し誘導する必要がある。

「あとは、何処の勢力に肩入れするかなんだけど・・・ま、言うまでも無いか」

提供する技術を最低限“使えるレベル”に持っていける勢力。
提供する技術を“大量に量産出来る”勢力。
提供する技術を“合理的に使える”勢力。
詰まる所、それらの条件に合致する勢力は・・・。

「・・・アメリカだけだな」

領土を侵略されておらず、一定水準以上の技術力を持ち、感情論より合理性を優先させる国柄。

両者の利益を追求するパートナーとしては、合格ラインにある。

「取り合えず・・・・・・生き抜く事を最優先で頑張りますか」

第二話 隠れん坊は得意かな？（前書き）

お久しぶりです。

短いですが、第二話投稿です。

第二話 隠れん坊は得意かな？

取り合えずこの先の基本方針が決まり、地球に下りようと思つのだが……。

一つ問題が発生した。

「……どうやって地球に降りよう？」

マクロス世界の地球に比べたら貧弱極まりない防衛ラインだが、この地球にも宇宙から飛来する物体を補足迎撃する防衛網が張られている。

尤も、VF-27 のアクティブ・ステルス（AS）やビジュアル・ステルス（VS）を使用すれば、光学的・電子的に姿を消せるが、流星に大気圏突入時には偽装も荒くなり完璧に誤魔化す事は難しい。

まず大丈夫だと思つが、不安材料は極力排除したい。

「現状選択できる、突入方法は3つかな？」

- 1：ファイター形態で大気圏突入。
- 2：ガウオーク形態で逆噴射減速をしつつ大気圏突入。
- 3：フォールドブースターを使用して、大気圏内へ直接フォールド。

この3つが、現状での選択肢である。
それぞれの、利点と欠点は。

利点

- 1：突入時間の短縮。
- 2：突入時の大気摩擦が発生せず、隠匿性が高い。
- 3：直接大気圏内へ進入する為、大気圏突入プロセス事態が発生しない。

欠点

- 1：高速で大気圏突入する為、断熱空気圧縮による空気加熱で、大気がプラズマ化し機体周囲が明るく輝いてしまい、AC・VSを使用しても隠匿性が極端に低下する。
- 2：減速に長い時間かかり、大気圏上層を長距離移動するので、相手の索敵能力次第では発見される可能性がある。
- 3：フォールドブースターの使用限度回数が減る。

考查

- 1：最悪、大気圏突入中に不審落下物として攻撃衛星の核弾頭によって迎撃される可能性がある。
- 2：現地球側の索敵能力を考慮すると、VF-27が捕捉される可能性はほぼ0。
- 3：手持ちの切り札の一枚を劣化させる必要性はない。

結論としては・・・。

「ガウオーク形態で、A S・V Sを併用しつつ降下するのがベストかな？」

あとは、突入コースの選定。
ハイブ周辺を避けつつ、人目があまり無い場所・・・。

「南極圏に降下して、北上するか」

不幸中の幸いにも今の人類の目は、月や火星等の外宇宙・地表・地下に集中している。

これは、新たな着陸ユニットの襲来や新規ハイブ建造や地中侵攻の警戒に力を入れた結果である。

また、レーザー種が登場した事により航空攻撃が不可能に成った事も大きく響いている。

そして降下予定地点の、南極圏はいまだ本格的な調査や開発が行われていない事も大きい。

一年中ブリザードが吹き荒れる気候も好都合である。

万一降下の足跡を捕捉されても、現地調査はほぼ不可能かつ痕跡

もブリザードが全てを覆い隠してくれる。

通常の航空機では飛行不可能な天候であっても、VF-27には些かの問題にも成り得ない。

「それじゃあ、降下する前に外装パーツとフォールドブースターを隠しておくかな」

流石に地表での拠点を確保していない状態で、反応弾やFBを持ち込むのは危険だと判断し、静止衛星軌道上を周回している手頃な小惑星を見繕いパーツを隠した。

降下自体はフル装備でも可能なのだが、装備品の管理が難しい。万一暴発でもしたら、目も当てられない状況になる。

「降下準備完了。 周辺宙域クリア。 AS・VS正常作動。
降下軌道クリア。 ……降下開始」

ガウオーク形態に可変し、大気圏降下を開始した。

減速は予定通りに巧くいき、大気のパラズマ化は発生していない。

このまま順調に行けば、あと数分で降下を完了するだろう。

「あっ……南極って事は、ペンギン見れるかな？」

第三話 何事も土台が重要（前書き）

前回から大分遅れて申し訳ない。

気分転換に、“未来人の異世界漫遊記iNISIS”と言う作品を書き始めました。

其方の方もどうぞ見て見て下さい。

第三話 何事も土台が重要

無事、地球各勢力に見つかる事無く大気圏降下に成功。

降下地点は予想通りのブリザード。

視界はほぼゼロ。

この状況では、通常の航空機では何処を飛行しているのか分からずに墜落してしまうであろう。

もつとも、VF-27 ならほとんど問題には成らない。

衛星軌道上に隠した大型複合センサーアンテナパーツとのデータリンクにより、現在位置等の情報は得ているので特に問題は無い。

暫くブリザードの中を飛行すると、南極大陸を抜け南太平洋上に到達。

久しぶりに見る、有人惑星の海。

人工物でない本物の海。

見渡す限りの青い海。

何万光年と旅をする宇宙移民にとって、この海がいかに貴重な物かは実感として知っている。

それだけに残念に思う。

簡易計測の結果、大気中の放射能物質含有量がデータベースに残る星間戦争前のマクロス世界の地球（以降M地球）に比べて、かなり高レベルで検出できた。

即座にどうにか成ると言う訳ではないが、このまま放置すれば生態系にかなりの影響が出る。

一度完全に生態系が全滅したM地球を知る身としては、残念極まりない。

「まあ・・・今の段階ならまだ、手のうちようはあるかな」

幸か不幸か、VF-27 のデータベースには、様々な技術データが圧縮保存されている。

民間から軍事、工作上知りえた研究室レベルの最新技術など色々ある。

勿論、半世紀ほど昔に使用された技術の製造法から運用方法も。

そう、『地球大気浄化作戦』に使用された各種化学反応剤のデータを。

「カナダの半分を汚染した米国なら、ノドから手が出るほど欲しい技術だろうな」

五大湖周辺の工業力の復活及び全力稼働。

生存不可能圏内の資源採掘再開。

長期的な汚染の解消。

その上、焦土作戦を展開しているユーラシア各国には極めて強力な外交手段にもなる。

「もともと、手札を早々に明かす気はないけどな」

それに正体不明の人間が持ち込んできた、海の物とも山の物とつかない怪しい化学薬品を即座に散布するとは考えられない。

暫くは細々と活動しつつ、社会的信用もしくは技術的信頼を得る必要があるな。

「あれが、フロリダ半島かな？ レーダー反応、付近に艦船航空機の機影無し 闇夜に紛れるのが得策だな」

目視圏にアメリカ本土が映った。

日が傾き夕焼け空に成っているので、もう少し時間を置いてから上陸する事になる。

だが、その前に海底でする事が……。

「有った有った。 政府専用秘匿回線用海底通信ケーブル」

軌道上での情報収集の結果、本土近くの海底に埋設してある事が判明した海底ケーブルに用があった。

基本的な事だが、異邦人たる自分には戸籍が無い。

アメリカで活動する以上は、確実に必要なものである。

「政府筋から、情報機関筋に……結構一杯有るな。 居ない筈の人間を一人存在させるには」

そんなこんなで、今までのシャドウワークじこみの腕まいを存分に振るった。

その結果、一人の人間が情報上に違和感無く誕生した。

“ブルース・オースティン”

これが新しいオレの名前と成る。

これで、最低限の準備は完了。

後は、粛々と行動して行くとしよつ。

「あゝあ……………これから暫く事故が続
くな」

第三話 何事も土台が重要（後書き）

多分、奇麗事だけで一人の存在を作ること出来ませんよね・・・？

第四話 日々平穩に過してる心算です・・・多分。

不幸な事故が偶々増加した日々から1年程経った頃、俺は動きだす事にした。

因みにこれまでは、特に大きな動きを見せはしなかった

精々、表に出せない裏金をちよるまかして、とある町に一軒の機械修理工房を開いたぐらいだ。

主な業務は、一寸した電化製品や農業機械、玉に車の修理等である。

利用客の声は

・冷蔵庫を修理して貰ったら、月の電気代が3分の2に成った。

(30代女性・主婦)

・トラクターの整備を頼み戻って来たら、燃費が3割アップして

いた。(40代男性・農家)

・PCの修理を頼み戻って来たら、処理速度が大幅にアップして

いた。(20代男性・学生)

等等である。

工房の評判は概ね“腕は最高に良いが店長が無愛想”と言う評価だ。

微妙々に、納得がいかない評価である。

まあ、そんなこんなで表面上は日々平穩に過して居る。

「と言つ事で、射撃場に来てみたしだいだ」

「？ 店長、誰に向かって言ってるんですか？」

「気にするな。それよりさつさと準備をするぞ」

「はい」

そんなこんなで日々平穩に過していましたが、そろそろ頃合かな
と思ひ行動を起こした。

因みにこの同行者の助手は、アルバイト学生の“クリスティーナ・
シャーロック”通称クリス。

近くのハイスクールの学生で、手先の器用な16歳の女子学生で
ある。

他にも何人かアルバイト希望の学生が尋ねてきたが、その中でも
彼女の柔軟性や理解力は一番優秀だった。

まあ、見た目は只の天然お気楽娘にしか見えないが。

「店長。準備できましたよ」

「ああ、こつちも準備できた」

今回射撃場まで来たのは、こちらの技術で再現出来る様に作成したりニアライフルの試射の為である。

M地球製のニアライフルにはOTM技術オーバー・テクノロジー・マクロスが使用されているので、OTM技術を使わない形で再現を試みた品物である。

M2をベースにニアライフル仕様に改造を施した品である。

最も、OTM技術を使用しない事を前提に組み立てた為、素材レベルで色々と問題点が多発している。

「おいブルース、標的に戦車を用意しろだなんて、今日は一体何の試射だ？」

「ああ、爺さんか。何、一寸した技術書を手に入れてな。面白そうだから作ってみた」

「何の？ まあ良いさ、金さえ払ってくればこつちとしては問題無いさ」

トレーラーハウスから姿を現した、恰幅の良い白髪の爺さん。

この射撃場のオーナーである。

この爺さん、どう言う伝手があるのかは分から無いし、調べる気も無いが、標的の準備を頼むとWW？時代の重戦車を調達してきた。

「それは良かった。一寸派手に成ると思うから、後片付けの方は頑張ってください」

「そりゃどう言」店長、チャージ終了しましたよ」・・・」

「と言う訳だ、早速始めさせて貰う」

爺さんが何か言いたそうにしているが、クリスから試作エネルギーキャパシターへのチャージが終了した事が伝えられるので話を打ち切り試射の体勢に入った。

M2を改造した、車両固定式のRRX-M0。

設計上は口径12.7mmのタングステン製の硬芯炸裂鉄鋼弾を、電磁加速と液体炸薬によって秒速2km超の初速で打ち出される事になっている。

「いいか？行くぞ・・・5・4・3・2・1・0！」

RRX-M0が火を噴いた。

電磁加速され、硬芯炸裂鉄鋼弾が超高速で飛翔する。

弾は狙い変わらず、重戦車の正面装甲板に命中した。

装甲を突抜け、車内に飛び込み高性能爆薬に点火。

車内を爆砕し、砲塔部を内部から吹き飛ばした。

「じ、こいつは・・・」

「ふむ、凡そ計算通りだな」

「わあゝ。 戦車綺麗に吹き飛びましたね、店長」

三者三様。

爺さんは、目を見開き驚愕。

クリスはしきりに関心。

俺は冷静に分析する。

R R X - M Oの仕上がりは予想通り。

やはり、M地球との技術レベルの隔たりの問題点が噴出した。

R R X - M Oは現在、砲身冷却とエネルギーキャパシターへの再チャージを行っている。

大電力を電磁加速装置に流し込み加熱した砲身を水冷式冷却機が急速冷却している。

M地球製リニアライフルは、電磁加速装置に常温超伝導体を用いている為に冷却の必要は殆無い。

又、エネルギーキャパシターも現用技術での大容量小型化は不可能と言う結論に達した。

試作キャパシターは小型冷蔵庫並の大きさで一発分の容量しか確保されず、充填に1分前後必要と言う代物である。

電源も、車両エンジン直結のダイナモを回し発電する方式を取っている。

その後も、断続的に射撃を続行する。

20発ほど撃った頃には砲身の廃熱が追いつかない様になり、射撃不能と成った。

標的としていた重戦車は見るも無残に破壊され炎上していた。

「……こいつは……トンでも無い物を作りやがったな」

「？ 店長、あれって粗大ゴミを材料に作っていましたよね？
そんなに凄い物なんですか？」

「さあ？ 爺さんの様子を見る限り凄くないのか？ 俺的
には、興味深い玩具でしかないんだが……」

技術流用の検証用に作った品物なので、本当に玩具でしかない物
なんだが……。

おい爺さん、何て顔で俺達を見てるんだ？

幽霊でも見えたか？

(何つつもんを作りやがるんだ、こいつらは)

最近、町で評判に成っている工房の店主のアンちゃんが射撃場を
貸せって言って来た時は、一体何の様だと思ったが……今じゃあ、
良い意味で予想外だったぜ。

標的に戦車を用意しろって言って来た時は、正気を疑っちゃまった
な。

まあ軍人時代に作った伝手を使って、破棄予定のWW?時代のオ
ンボ口戦車を二束三文で手に入れてやったがな。

当日、工房のアンちゃんやアルバイトの嬢ちゃんと一緒にジープ
に乗ってやって来た時には思いにもし無かったよ、用意した戦車が
蜂の巣の鉄屑に成るとはよ。

ジープの荷台に掛けられたシートの下から出てきた、M2重機関
銃の見た目は異様だったな。

延長された銃身に付けられたカバーから、コードが何本も延びて
荷台の小型冷蔵庫と給水タンク繋がられた姿はよ。

一体何の玩具だ?って思っちゃまった。

その認識も直に、引っ繰り返っちゃまったがな!

試射をした時は、人生の中でもそうは無いつて位に驚いちゃった
よ。

たった一発の銃弾で、ボロとは言え正面から重戦車を破壊しちま
うんだからな!

だが、本当に驚いたのはこの後だったよ。

あいつら、こんな凄い物を粗大ゴミなんかで作ってやがったんだ
とよ!

そして思ったよ、これならあいつ等にも通用するんじゃないかっ
て。

(確かあいつ、今は軍の技研所長を遣ってるって言っていたな)

「・・・ん？何か今、背筋に冷たい物が走った様な気が？」

第四話 日々平穩に過してる心算です・・・多分。(後書き)

ブルースさんは、少しずつ行動を起こして行く心算でした。

感想待っています。

第五話 不本意ながら、請負業務始めました。

1981年8月上旬

RRX-MOの試射から半年が過ぎた。

何処でどう間違ったのかと、後悔する日々が続いている。

今現在、自分とクリスは国防総省の外部協力者をしている。

所属は、米国陸軍技術研究所・技術開発局装備課・銃砲技術開発部・EML(Electro Magnetic Launcher)：電磁投射砲)開発担当外部協力班だ。

班と言っても人員は、自分とクリスの二人だけ何だかな。

何でこうなったかと言うと、爺さんが原因だ。

RRX-MOの試射から1週間ほど経った頃、工房に数人の黒服が姿を見せた。

初めは裏金流用か戸籍偽造がバレたかと思っただが違った。

極普通に来客対応をしてみると、黒服の代表者が用件を切り出してきた。

「ブルース・オースティンさんですね？ 私は米国陸軍技術研究所所属“イアン・マクレーン”技術中尉です。今回工房を訪ねさせて頂いたのは、あなたが作成されたりニアライフルの件です」

「誰から、その事を聞いたんだ？ クリス、お前か？」

「？ 違いますよ、店長。 私じゃないですよ」

RRX-MOの事を知っているのは自分とクリスと爺さんだけだから、漏れるとすれば後は爺さんからか。

「情報提供者は、ガードナー退役陸軍技術中佐です」

あの爺さん、元軍人の将校かよ。
失敗したな、やっぱり身元を洗っとけば良かった。
もう遅いか。

「中佐より頂いた情報で、あなた方が作成された品が我々にとっても有用だと考えました。そこで物は相談なのですが、その品を我々に譲って貰えないでしょうか？ 勿論、謝礼は十分に」

「謝礼と言われても……な？」

「言われても……ね？」

俺とクリスが顔を見合わせ、曖昧な笑みを浮かべる。

中尉さんも不安な顔を向けてくるが、まあ……ね？

「申し訳ないがアレ、今壊れてるんだよ」

「元々、粗大ゴミの寄せ集め品ですし」

「……」

取り合えず撃てれば良いかな？的に作った品だったので、今RR
X-MOは壊れている。

銃身は熱膨張で変形し、試作エネルギーキャパシターと加速用コ
イルは熱で所々溶解した。

何か中尉さんの顔色が段々悪くなっている様な気が……。

「あゝ材料を用意してくれるのなら、一日有れば同じ物を作る事
は出来るが？」

「コイル巻に時間は掛かりますけど、組み立てだけなら一日有れ
ば作れますよ？」

「ほ、本当ですか!？」

偉く喜んでくれるな。

20発も撃てば壊れ様な品が、そんなに嬉しいのか？

「ならば是非、材料も機材も直にご用意しますので」

まあ良いか。

そんなこんなで、材料が届けられ完成品と仕様書を受け渡したのは交渉から3日後だった。

その後、数日は平穏な何時も通りの日常が過ぎ去っていった。しかし、RRX-MOの試射から2週間後、事態が急転直下で動いた。

「……て、店長」

「……で、マクレーン中尉。これは一体どう言う事だ？」

何故か知らないが俺とクリスは今、マクレーン中尉と共に陸軍技術研究所の小会議室に居る

「その、えーっと。 オースティンさんからお譲り頂いた品の評

価試験の結果が思いの外良好だった為、上が是非とも実用化の方向で計画を推奨して欲しいと……」

「したいのなら、すれば良いじゃないか？ 何故俺たちが此処に呼ばれる？」

俺を巻き込むな。

物があれば、そこから自分達で複製品位は作れるだろうが。

「お恥ずかしながら今現在、技研では省内でATDP計画と呼ばれる計画に大半の人員が掛かりつきりの状況でして、新しい分野の研究に人手を割く余裕が無いのです。しかし、それを理由にコレ等を破棄してしまうのは余りにも惜しいと我々は判断しました。そして、人員が足りないのなら開発者に継続して研究して貰えば良いではないか？と言う結論に達しました。そこで相談なのですが、オースティンさん、シャーロックさん。このEMLを完成させて貰えないでしょうか？」

……いやさ？

問題点を改善して完成させるだけなら、割と簡単だよ？

でもさ、一般市民に丸投げって言うのはどうよ？

仮にも国防を預かる一部門が、忙しいからと言って丸投げは無いよ丸投げは。

しかも、場の雰囲気的に断るのは無理そうだし。

溜息しか出ないなあ。

それとな、クリス。

期待した目でこっちを見るな。

「……………予算と時間は多めに貰うからな」

せめてもの抵抗だった。

結局、俺の工房は国防総省の依頼でEMLを作成する事になった

(本当にこれは凄い！ ガードナー退役中佐の話聞いた時は眉唾だと思っていたが、これ程の物だとは！)

私は目の前にあるM2の改造品、仕様書に書いてある名称RRX-MOに心を奪われていた。

ジープの荷台に固定されたRRX-MOからは何本もコードが延び、同じく荷台に備え付けてある小型冷蔵庫と給水タンクに接続されている。

仕様書によると、小型冷蔵庫がエネルギーキャパシターで給水タンクが冷却水と成っている。

発射手順はジープのエンジン直結のダイナモで発電し、エネルギーキャパシターに蓄積、弾丸の発射と連動し加速コイルに順次通電

と成っている。

12・7mmタングステン製の硬芯炸裂鉄鋼弾を2Km超の初速で発射するトンでも銃。

まあ、試作品らしく毎分1発で20発前後撃つと壊れると言うがそこは大目に見よう。

問題はそんな事ではなく、その威力だ。

WW2時代の重戦車を蜂の巣にしたと聞いていたので、標的にと用意されたのはF-4の正面装甲とサンプルとして保管してあった突撃級の前面装甲だ。

結果は、F-4の正面装甲は1発で貫通し後方の固定用治具を破壊した。

突撃級の前面装甲は1発目で装甲厚の70%を抉り取り、2発目で貫通し後方の固定用治具を破壊した。

この結果に発射試験に参加した研究員は皆、驚愕と感動と僅かな嫉妬を覚えた。

その後も、RRX-MOが潰れるまで取れる範囲でデータを採取する。

それら採取されたデータを纏め、報告書を上に出した。

これに対し上層部の反応は早く、EML開発の命令が降りてきた。だが困った事に技研は今、ATDP計画で余剰研究員は枯渇している。

それでも正式な命令が降りているので、研究開発はしなければ成らない。

そこで思いついたのが、RRX-MOの開発者であるオースティン氏に作製を依頼し様という物だ。

(彼ならきつと、この依頼を受けてくれる筈だ！)

「……あれ？もしかして、今の状況は初期計画とそんなに差異無く無い？」

第五話 不本意ながら、請負業務始めました。(後書き)

結果オーライ？

それとも、不幸？だ？

感想待っています。

第六話 試作品提出、割と真面目に作っています。

1982年2月中旬

国防総省からの依頼を受けてから、凡そ一年が経った頃。

中間報告用として、試作機RRX-M01を軍の方に提出する事にした。

今回の品は粗大ゴミのリサイクル品でなく、週末に直々通って技研の試作機破棄庫で拾い集めた部品を使用している。

軍用品だけあって、中々の品質と精度を持った部品が集められた。搬送に当って俺達と軍の繋ぎ役のマクレーン中尉が品物を受け取りに来たが、何と言うか雰囲気怖い。

まるで一日絶食させられ犬が、目の前に用意されたご飯をお預けされたみたいに。

「それではマクレーン中尉、RRX-M01の輸送を頼む」

「RRX-M01、確かに受領しました。搬送作業はお任せ下さい…」

無駄に力入ってないか？

それに何故か、中尉に随行してきた大型トレーラーの中にジープ事運び込まれているし。

前のと扱いが違いすぎないか？
そのジープも、自走できるぞ？
まあ、良いけどな。

「あつ、そうそう。序にこの書類と報告書も一緒に頼む。 R
RXの改良点の考査と新しい奴の仕様書だ」

「お預かりします」

RRX - M01、RRX - M0を軍用部品を使って改修して品だ。
基本的に新規設計製造した部品は無いが、スクラップにされていたF - 4等の廃棄戦術機から部品取りをして、再加工した物を使用している。

特に噴射ユニットの、超耐熱単結晶合金は役に立った。

基本的にRRX - M0は、耐熱や冷却に問題点が集中していたと言っても良い。

冷却系もRRX - M0は水を使用していた水冷だけだったが、RX - M01は水冷+ガス冷の冷却系に変更し冷却効率を上げた。

エネルギーキャパシターも使用する材料の変更で、同じ大きさのまま三発分のエネルギーを貯める事が出来る。

RRX - M0に比べて周辺機材は少し大掛かりにはなったが計算上、加速用コイルと砲身冷却に20秒で再発射が可能になった。
発射サイクルは毎分3発。

キャパシターを2基設置したので、交互にチャージしながらの射撃ならば同一サイクルでの連続射撃が可能となる。

「今回の改良は冷却系の強化と各 부품の耐熱性の向上に主眼を置いてあるから、100発位なら焼き付く事は無いと思う。また、廃品の再利用品だから製作コストも其処まで高く無い。電源や周辺機材の小型化は、次回以降だ」

「期待させて貰います。我々はまずこの、RRX-M01の評価試験から行わせて貰います」

そう言いながら、マクレーン中尉達は帰って行った。

正直言ってRRX-M01は常温超伝導体製加速コイルでも作らない限り、単銃身でのこれ以上の安全な発射サイクルの向上は余り見込めない所まで冷却系は性能向上させた。

電源に関しては、ガスタービン発電機を小型軽量化した物をと考えている。

周辺機器の小型化も、専用に部品を設計製造すればコストは嵩むが解決は出来る。

そう遠くない内に依頼の品は完成品が出来るだろう。

まあ、俺にとってRRX-M01は軍用部品を使つてのM地球製リニアライフルの再現テストベットでしか無いのだがな。

それに今回の依頼のお陰で、今現在の表で使われている米軍の技術レベルが凡そ分かったのは収穫だ。

HI-MERF計画の技術やG元素の存在を考慮すれば多少劣化すれど、M地球製兵器群の製造は可能かも知れない。

(言葉が出ないとは、この様な時に使う言葉なのかも知れないな)

オースティン氏から預かってきたRRX-MO1。

前作RRX-MOの改良品だ。

私達は前回と同じ様に標的を用意して、発射試験に臨んだ。

その結果は、前回と同じ様に驚愕の内に始まった。

銃弾の威力こそ前作と変りは無いが、今作は20秒の同一サイクルで連射が可能となっていた。

前作は20発前後で砲身や電装が熱で溶解していたが、今作では100発程連射が可能で、十分な冷却時間と高温に成った冷却水の交換で再度連続発射が可能と言う出来に仕上がっていた。

冷却系の強化と耐熱性の向上に主眼を置いていると言っていただけあって、流石オースティン氏としか言えない。

砲身と加速コイルの冷却に20秒、毎分3発と言う発射速度。

このままでも、汎用輸送車両に搭載すれば現用戦車の簡易品としても使用できる。

貫徹能力は主力戦車の105mmライフル砲を大幅に上回り、射程も5000mと極めて長い。

何より小口径弾薬の為、一車両の保有弾薬量が戦車砲の数十発とは桁違いの保有量になるのだ。

物量戦であるBETAとの戦いに置いて、戦車砲と同等の攻撃を長期的に継続して行えると言う大きなアドバンテージを得る事が出来る。

これ程の品なのにオースティン氏からは、更なる小型化と高性能化が進む予定と聞いている。

（製作コストも安いし、こいつを少量産して実践運用テストに廻してみるか？ 確か、次期汎用輸送車両の試作車も完成したと聞いた事がある。 試作品同士、実験兵器と言う事で製作案を上申し（て見るか）

「砲身を多砲身化すれば、特殊な材料を使わなくても発射サイクルを向上させられないか？ ……あれ？ 俺、何で真面目に改良案考えてるの？」

第六話 試作品提出、割と真面目に作っています。(後書き)

2砲身にして10秒1発の毎分6発にするか、4砲身にして5秒1発の毎分12発にするべきか。

感想待っています。

第七話 裏仕事と依頼完了? (前書き)

お気に入り登録100件突破、皆さん有難うございます。

第七話 裏仕事と依頼完了？

1983年1月下旬

RRX-M01の提出から凡そ1年。

試験結果が良好だった為、技研上層部がEML実用化の兆に重い腰を動かした。

既存品銃器と廃棄予定の部品によって作られたRRX-M01でこの結果なら、専用に設計製造したらどれ程の物だろうと。

そして、どのルートでこの情報を得たのか知らないが、ジネラルエレクトロニクス社（以降：GE社）が共同開発企業にと名乗りを上げた。

初めGE社はこちらが小規模の工房と言う事もあり、高圧的な態度で不平等な契約を迫ってきた。

まあ、片や米国でも有数の大企業、片や小さな町の小さな個人工房だからな。

お陰で久しぶりに仕事（裏仕事）をする事に成ったが。

その結果、契約に関係していたGE社重役陣が汚職や脱税で次々に退陣した。

そのかいもあって、次の契約交渉は実にスムーズに事が進んだ。担当者の顔が引きつって青くなっていたのは、実に笑えた。

ゴタゴタが片付き開発共同が進むようになったが、基本の開発は既に完了していたので設計図をGE社に渡して試作品の製造を任せた。

そして遂に試作品RRX-M02が完成した。

「設計図通りの出来みたいですね」

「ええ、オースティンさんから預かった設計図は殆ど手直しは必要ありませんでしたし、基本的なデータも出揃っていたので開発自体に大きな問題は出ませんでした」

「それ以外で、問題が有った様な言い方ですね」

「貴方が言いますか、貴方が？」

「さて、何の事やら？」

昔の事をネチネチと。

この人はGE社のEML開発担当者“グレッグ・ハワード”さん。

含み笑いを向けると、小動物みたいに怯える弄りがいの有る人だ。

「これから試射ですよね？ 何処で遣る予定ですか？」

「一応、社の発射試験場を予定しています」

「それなら、早速向かきましょう。　クリス、移動するぞ」

「はい」

俺達3人はRRX - M02の搬送手続きをした後、GE社の発射試験場に向かった。

と言う訳で遣って来ました、GE社の発射試験場。

既にRRX - M02はスタンバイされている。

RRX - M02、RRX - M0とRRX - M01から採取したデータを元に全面新設計のリニアライフルだ。

本体全長2000mm・重量25kgの四砲身回転ドライブ式、5秒に1発のサイクルで毎分12発で発射が可能。

全体としては、小型大容量エネルギーキャパシター（6発分）×2・冷却液タンク（20？）・小型ガスタービン発電機・発電機用燃料タンク（20？：一時間分）と言う総重量100kg近い構成である。

そして、キャパシターのフルチャージには30秒程掛かるので、発射サイクルも毎分12発が今の所の限界である。

又、全長が伸び加速距離が伸びた分、初速はRRX - M01より上がった。

液体炸薬と電磁加速の併用により、初速：2400m/s } 2800m/s・射程距離：5000m } 7000m・装弾数：1帯1

20発（ベルト給弾）と言うスペックだ。

まあ、多数の弾薬に複数の周辺機器に本体重量だけで25kgと言う、生身の人間一人での行動と運用は不可能と言う欠点もある。

「もう少し、軽量小型化が出来ると良いのですがね」

「ハワードさん、現状でこれ以上の小型化は難しいですよ。室温超伝導体（グレイ9）でも有れば、冷却系の撤去・キャパシターの大容量小型化なども出来て総重量も半分以下に出来るんですが」

「あはは、店長。そんな物、まだ何処も作って無いから無理ですよ」

「……」

序に揺さ振りも兼ねて、ハワードさんの前でG元素の事を仄めかす様に話題に出してみたが……ビンゴだな。

GE社の主任開発担当者クラスの人間なら、G元素の事も知っているかもと思ってカマをかけてみたが……。

この反応なら、マズ知っているな。

まっ、現状でこれ以上の追求はしないがな。

「……あつ。オースティンさん、シャーロックさん、試射が始まるみたいですよ」

「そう見たいですね」

「楽しみです」

話題を反らす様なハワードさんに促されて、試射体勢に入ったRX-M02の方を見る。

500m間隔で設置された前回と同じ標的に向かって、今正に発砲し様としている姿が目に入った。

(若いのに本当に凄い奴らだ。 私が彼らと同じ年頃、一体何をしていた事か……)

RRX-M02の試射を見つつ、私は彼との出会いを思いかえす。私が彼と出会ってから、もう1年位になるか。

初めて会った時の印象は、無愛想な青年と言う物だった。

どう言うルートか知らないが、軍の委託で民間のとある工房がEMLを実用化し様としていると聞いた。

そして、上司からの指示はEML開発を共同開発と言う形に持ち込み、その技術を奪えと言うものだった。

流石に私もそれは拙いのでわと上申ししたが聞き入れて貰えず、用意された契約書を持ち渋々その工房との契約交渉に足を運んだ。

私は気持ちを切り替え、相手が24歳と聞いていたので交渉を有利に進める為に高圧的な態度で挑んだ。

交渉は初め順調に進んでいたが、条件面の確認で問題が発生した。正直、何だこの条件は！？と言うのが私の本音だった。

余りにも、彼等に不平等な条件が羅列してあった。

無愛想な彼も、眉を顰め契約用紙を凝視している。

幾ら米国有数の企業であろうとも、この契約は無いと思う。

流石に私も一度会社にこの契約書を持ち帰り、上司を再度問質したいと思ったので彼に1週間後にもう一度来ると言い契約書のコピーを残し会社に戻った。

会社に戻り上司を問質すが、残念な事に契約条件の変更は認めないと言う返事が返ってきた。

私は1週間後に再度彼の元を訪ねるのが、とても気が重くなる思いだ。

しかし、その心配も翌日から解消され始めた。

契約交渉を指示した上司を筆頭に、契約内容の作製に関わっていた重役陣が次々に汚職や脱税で退陣や逮捕され始めたのだ。

社内で流れる噂では、ATFS計画関連のゴタゴタが一部重役の退陣理由だろうと言うのがの主流だ。

しかし、そんな中で私は違う理由だろうと半ば確信していた。

それが確固たる物に変わったのは、次に彼に会った時だった。

今でも、あの時彼が浮かべていた含み笑いは忘れられない。

あの時だろうな、彼との関係の上下関係が決まったのは。

その後の契約交渉は、比較的スムーズに進行した。

契約内容の変更は、社の重役会でも色々紛糾したらしいが最終的にはCEOの鶴の一声で纏ったらしい。

契約内容は凡そ平等、少し彼が有利と言つ形で話は落ち着いた。彼は、一体どんな手を打ったんだか……。

色々有つたが、契約交渉が終わつた後のEML計画の進行は極めて順調に進んだ。

殆ど完成品と言つても良い設計図、豊富な各種採取データ、計画の70%以上は我が社が参入する前に完了していた。

我々が手を出した所と言えば、設計図通に部品を製造し組み立てる……これ位だった。

そして完成品が今、目の前で断続的に火を噴いている。

500m間隔で置かれている標的を、RRX-M02は次々と蜂の巣にして行く。

戦術機にも使用されている装甲版は、鉛細工の様に貫通され後方の固定用治具は破壊されていく。

戦術機を初めて見た時も驚いたが、これには別種の驚きがある。

(彼等とは、長い付き合いに成るかも知れないな……)

「これで依頼も達成か、暫くはゆっくりと……え？
新しい依頼
ゆっくり出来ないの？」

第七話 裏仕事と依頼完了？（後書き）

戦術機関連にも関わるべきか、銃器関係一本で頑張るべきか。

感想お待ちしています。

第八話 迷惑な人と新たな依頼（前書き）

お気に入り登録200突破、300間近。

有難う御座います。

第八話 迷惑な人と新たな依頼

1983年2月下旬

RRX-M02の初試射から、一月。

大きな問題も発生させずに、RRX-M02は順調に試験項目を消化。

そんなある日、技研から次期汎用輸送車両の試作車両が一台届けられた。

「これは……この車両にRRX-M02を搭載しろと言う事かな？ どう思います、ハワードさん？」

「多分、そうじゃないかと……。こいつの天井に本体を備え付け車内に周辺機器を乗せた、簡易戦車として使う気ですかね？」

「攻撃力と機動力は兎も角、これ紙装甲ですよ？ 多分、一撃でも食らったらお仕舞いですよ？ 店長、これ乗りますか？」

無論断る。

レーザー兵器を使う敵に、地面を走る4輪の紙装甲で突っ込む等正気の沙汰とは思えない。

ピンポイント・バリア……いや、せめて対光学兵器気化塗料が欲しい。

「辞退する。今の時期に車載テストと言う事は、欧州辺りの戦線で実戦テストでもする気か？」

「多分その心算だと思いますよ？ 次期汎用輸送車両の試作機を引っぱり出して来た所を見ると、一緒に実戦テストを済ませて仕舞おうって事じゃないですか？」

「店長、宣伝も兼ねているんじゃないんですか？ ウチ（米国）が、こんなの作りましたよって」

有りえる。

流石にRRX-M02は輸出しないだろうが、RRX-M01のモンキーモデル位なら輸出しそうだな。

基本破棄部品の寄せ集めで作ったから製作コストもかなり安いし、輸出すれば儲けはかなり出そうな気が。

「まあ、その辺りは上に任せるさ。取り合えず注文の品を完成させるとしよう。何ぜか、他の依頼も入ったしな」

「おや？ オースティンさん、他にも国防総省から依頼が入っているんですか？」

「ええ、藪蛇を踏んで仕舞いましてね」

「技研から、破棄されえた強化外骨格を貰ったんですよ。趣味で改良したのをマクレーン中尉が目聡く見つけて、また上に報告したから研究開発依頼が舞込んで来ちゃいました」

クリスの言う通り、又マクレーン中尉が余計な事をしてくれた。アレは、RRX-M01を製作していた時の事だ。

技研の試作機破棄庫に部品拾いに出かけ、倉庫の中を物色している時に見つけた。

倉庫の隅に、ハーデイマンの改良機みたいな奴が鎮座していた。装甲板や電源を取られ、基礎フレーム剥き出しの姿で。

何と無く気になったので技研の研究員に確認を取った後、工房に持ち帰りチマチマ改造を施した。

「どんな物を作ったんですか？」

「基本、破棄部品の寄せ集めで作っていたんですけど……。不思議な事に、是非開発続行をと言う事に話が進んで」

「……又二人で、トンでも無い物を作ったんじゃないんですか？」

「……？ そうなんですか、店長？」

知らん。

基礎は普通の強化外骨格と変らん。

大きく変更した所なんか、操縦系を後追いのマスター・スレイブ方式からEX-ギアの先行行動筋電位観測方式に変えた所と、搭載プロセッサーを増やして並列処理速度を上げた位だ。

確かに動作速度が上がって、格闘戦も出来る様になったが其処まで驚くような事か？

その事をハワードさんに話したら、変な表情をしていた。

「……それだけ遣れば、十分ですよ」

十分なのか？

基準が良く分からん。

EX-ギアのように、機装強化兵競り合う事は出来ないんだが、正面から対峙したら、袖一色で破壊されると思うぞ？

（ははっ、流石はオーステインさん！ 銃火器専門かと思えば、こんな技術も持っているとは！）

今、私の目の前で2台の強化外骨格が重苦しい足音を立てながら

格闘戦を演じている。

軍が採用している本来の強化外骨格と言うのは、一兵士単体で使
用が困難な銃火器を運用する為の装備の事だ。

間違つても、今日の前で行われている様な格闘戦を行う様な装備
では無い。

ES-XO。

それが、目の前で格闘戦をしている強化外骨格の名である。

初め、私がコレを見たのはオースティンさんの工房だった。

RRX-Mシリーズ開発に伴い拡張された作業場の隅の隅に、ヒッ
ソリと置かれていた。

オースティンさんが、技研から強化外骨格の基礎フレームを持ち
出していた事は知っていたが、どの様に扱っているかは知らなかつ
た。

強化外骨格は見た所、内部機器保護用のシンプルな一时装甲が取
り付けられている状態で置かれていた。

オースティンさんに聞いた所、クレーンやリフトの代わりに使っ
ているそうだ。

そんなやり取りをしていると、シャロックさんが強化外骨格に
乗り込み動かし始めた。

その動作は、私が見てきたどの強化外骨格よりスムーズかつ精密
だった。

シャロックさんが、強化外骨格を着用したままジープの後部を
持ち上げドライバーで作業を続行している姿を見て、私はRRX-
M0を見た時と同じ様な衝撃を受けた。

そして、決意した。

この強化外骨格を完成させるべきだと。

私は早速技研に戻り報告書を作成し、上層部にこの強化外骨格の
事を訴えた。

そしてRRXと言う実績が有った為、国防総省からもGOサインが出た。

私は早速オースティンさんに、軍用強化外骨格の製作依頼した。オースティンさんはRRXの時の様に難色を示されたが、私が誠心誠意何度もお願ひに向かうと最終的には了承して貰えた。

そして、ES-X計画と名付けられた新型強化外骨格開発計画が始動した。

既に開発最終段階まじかのRRX開発計画は、新たに参入した共同開発企業が後を引き継ぎつつ主体に成って進める事が決まった。

そして、ES-X計画の最初成果が今目の前で格闘戦を繰り広げていた。

既存の強化外骨格を遙かに上回る追随性と運動性。

繊細かつ自在に動く五指マニピュレータ。

（まだ計画も始まったばかりなのに、この機体！ 凄い。 凄いですよ、流石オースティンさん！）

「……ん？何か今、誰かが叫んだ様な気が？空耳か？」

第八話 迷惑な人と新たな依頼（後書き）

やっぱりあの人が原因で、新たな厄介事が舞い込みます。

感想待っています。

第九話 苦勞人と暑苦しい人（前書き）

お気に入り2000突破とか言っていたら、いつの間にか5000突破。
破。

有難う御座います。

第九話 苦勞人と暑苦しい人

1983年4月中旬

RRX - M02の各種試験は9割方終了、残すは実戦テストのみとなった。

実戦テスト終了後、採取されたデータと戦訓を反映した最終調整を行った後に、量産開始と言う予定に成っている。

其れに伴い現在のRRX開発計画は俺の手を離れ、以降はGE社主体で進められる事になっている。

又、幾つか問題点はあるが試作RRX - M02搭載汎用輸送車は一応の完成を見た。

「漸く、実戦テストまで漕ぎ付けましたね」

「ええ。むしろ、偏執的なまでの試験項目数を作った試験管に感心しますよ」

「そうですね、大まかに分けて300項目、全項目の総計が1645項目。幾ら新規格品と言っても、多過ぎるんじゃないんですか？」

そう、評価試験が3ヶ月以上も掛かったのは、途中から追加された試験項目数の多さに原因がある。

耐久テスト等の基本試験から冷却液に泥水や海水等を使った時の

影響テスト等、重箱の隅を突付く様な試験項目が多数列記されていた。

同型同仕様のRRX-M02を20セット増産し、各種試験を平
行処理した上でも3ヶ月以上掛かった。

「まあまあ、試作車両は来週にでも欧州戦線派遣部隊に向けて輸
送するそうです」

「あそこは撤退戦の最中じゃなかったですか？ もう少し後方支
援体制の整った安全な所で、テストはした方が良いんじゃないん
ですか？」

「以前、シャーロックさんが言っていた事が当たったみたいですよ」

「私……あつ！ 販売宣伝目的じゃないかって事ですか？」

「はい。 撤退戦の最中に汎用輸送車両搭載兵器で、大型BET
Aを狩る事が出来ると印象付けたい見たいですよ」

其れが、項目追加の原因か。

RRXを欧州各国との政治取引のカードにしたいのか。

大型種を遠距離から狩る事が出来る車載兵器。

追い詰められている欧州当りなら、多少譲歩してでも手に入れた
くなるだろうな。

「成る程。 まあ、そこら辺に俺達は感知しませんよ。 藪蛇は避けたいので」

「そうですね。 私も自分から進んで、軍や政治関係のドロドロした世界には関わりたくありません」

「私も出来れば遠慮したかったですよ」

まあ、ハワードさんの場合は、GE社の計画担当者と言う事もあって仕方無い。

そんなハワードさんに、こう言うのは本当は辛いのだが……。

「そう言う訳で、ハワードさん。 ……後は任せた」

「頑張ってくださいね」

「ちよっ！ オースティンさん！ シャーロックさん！ 見捨てないで下さいよー！」

断る。

試験場を去ろうとすると縋って来そうだったので、含み笑いを浮

かべると諦めてくれた。

気の毒なので、後で何か送っておこう。

GE社の試験場を去った後、今度は技研の方に顔を出した。不本意ながら、ES-X開発計画に関わる事に成った為だ。既に、ES-X0として工房で使っていた強化外骨格を搬入している。

守衛に挨拶をしつつクリスト共に、技研の屋内動作試験場に向かう。

試験場内では、2台のES-X0が重々しい音を立てながら軍隊格闘の組み手を行っていた。

上段回し蹴りを繰り出す機体に対し、もう一台は体を屈ませ回避しつつ軸足に対し下段蹴りを放つ。

軸足を狩られ、背中から地面に叩き付けられ決着が付いた。

模擬戦が終了し立ち上がった2台は、試験場の隅で駐機体勢で停止した。

先ず胸部が鎖骨を中心に90度展開、続けて腹部が左右に開く様に展開、最後に腰部が股関節を中心に90度展開した。

そして、ES-X0の中から人が降りてきた。

取り合えず、挨拶はしておこう。

技研の研究員はES-X0に群がっているから無視して。

「お疲れ様、ES-X0の調子はどうですか？　“ローズ少尉”
“ノエル准尉”」

2台から降りてきた二人は、ES-X計画の為に陸軍から派遣されてきた男女の専属テストパイロット達だ。

1号機担当テストパイロット“ギルバート・ローズ”少尉。

2号機担当テストパイロット“シャロン・ノエル”准尉。

ES-Xは男女兼用での運用が予定されている為、男女一人づつ軍に派遣して貰っている。

「ああ、オースティンさんですか。　ES-X0は素晴らしいの一言です」

「ローズ少尉の仰る通りです。　今までの強化外骨格とは、別次元の代物ですよ！」

「そうですね」

正直言っ分かん。

本当に彼等が言う様に、凄い物なのだろうか？

EX-ギアに比べて主機出力も低ければ、モーター出力も低い。センサー系は言うに及ばず、装甲も紙に等しい。

「今までの強化外骨格は動きが鈍く、重火器の運搬固定運用器具って言うのが精々でしたが。こいつなら、BETA相手に格闘戦を挑んでも勝ってます」

「そうですね。特に機体の追随性が段違いです！既存の物で同じ様な動作をしようとすれば、ランサーが追い付かずに横転します」

まあ、ES-X0はパイロットがランサーの一部みたいな物だからな。

筋電位を観測してコンマ数秒先行して動く機体だから操作感覚に慣れたら、今までの機体以上に動けるのは当然の事だしな。

「コイツをこのまま配備したって、誰も文句は言わないですよ」

絶賛するのは良いが、詰め寄るな。

それと、その案は却下だ。

そもそもコイツは、クレーンやリフトの代用品だった物だぞ？

配備するとしてもせめて、戦闘用の物として作り直してからだ。

だから、詰め寄るな。

頼むからクリス、そこでノエル准尉と話して無くてコイツを止めてくれ。

（上官に技研への配属命令を貰った時は、こんなに凄い物に関わるとは考えても居なかったな）

辞令を貰ったのは、2月上旬の事だった。

新型強化外骨格開発計画が立ち上がったので、君を派遣する事に決まったと。

初めは新型強化外骨格と聞いて、あんなドン亀を今更……と思っただものだ。

技研に着くと応接室で、自分と同じ様に派遣されたいらしい小柄な女性軍人、ノエル准尉がいた。

技研に配属されて、初めの一月は新型機に関する座学の講義だった。

何でも、この新型強化外骨格……ES-X0は民間人が作製した物が元と成っているらしい。

初めて説明を聞いた時は、この研究員はフザケているのか？と思っただものだ。

しかし説明の続きを聞くと、その認識が間違いだという事にすぐ気が付く。

試作機の稼働資料映像を見た時は、目を見開き椅子から腰を浮かせてしまった物だ。

その後、既存機との変更点や新型機のテスト上の注意点が細かく講義された。

そして一月後、実機によるテストが始まった。

歩行から始まり、垂直跳び、走行等の様々な動作パターンを繰り返す。

返しテストした。

中でも5指マニピュレータ操作テストは難関だった。

特に、卵掴みが最難関だった。

いったい、幾つスクランブルエッグを作った事か？

この卵掴みが以外に上手かったのはノエル准尉だった。

畜生、コイツが正式配備される様に成ったら、絶対卵掴みを訓練項目に組み込んでやる。

そんな事をしつつ4週間程経つと、ES-X0をある程度不自由無く扱う事が出来る様になった。

そして始まったのが、模擬格闘戦テスト。

新型強化外骨格は、自分の体の延長の様に使用出来る事が最大の売りだ。

最初は一つ一つの動作を確認する様にユックリユックリとした動きで行っていたが、次第に動作のテンポアップして行った。

3週間も経つ頃には、生身で行う組み手と変わらない程度に成った。

(これでも十分凄いのに、コイツは初期試作機と言う。 開発計

画が進めば、一体どんな機体に仕上がるんだ!?)

「だ・か・ら、そんなに近寄るなど言ってるだろ！ それと、そこ！ 掛け算やめ、俺はノーマルだ！」

第九話 苦勞人と暑苦しい人（後書き）

ES-X0のイメージは、武装の無い全身装甲のISです。インフイニット・ストラトス
大体、2.5m〜3m前後の大きさを考えています。

感想待っています。

第十話 ヌックリする時間が・・・ (前書き)

お気に入り600件突破。

有難う御座います。

第十話 ヌックリする時間が・・・。

1983年6月上旬

RRX-M02搭載汎用輸送車両が欧州に到着し、現地派遣部隊が運用し活躍しているらしい。

何でも遠距離から大型種を中心に叩いて、戦場で一役買っているらしい。

弾速も従来の物とは桁違いに早く、遠距離でも命中率が高く高威力の為とても重宝しているとの事。

それに伴い、予想通り欧州各国から問い合わせが殺到していると伝え聞く。

そんな訳で、RRX計画の方は実戦テストも概ね良好らしい。

まあ、順調なようで何よりだ。

それとは別に、ES-X計画。

本格的に、追加パーツの設計を始めた。

手始めにES-X0に各種パーツを追加し、稼動テストを行う。

脚部にイン・ホイール・モータ式ローラー、腰部に近接武装、胸部にバッテリー内臓強化装甲、腕部に打撃用ナックルガード付手甲、頭部に複合センサーユニット。

これらは、ES-X0の後付装備になっている。

稼動データを採取した後、ES-X01の作成時に幾つかは内蔵し設計製作する予定だ。

そしてデータ採取の為、2台のES-X0は追加パーツを装着し、試験場内を縦横無尽に動き回っている。

「ローズ少尉、ノエル准尉。追加パーツの調子は？」

「良好です。追加バッテリーのお陰で出力・稼働時間共に大分伸びています」

「こちらにも、良好です。ローラはトルクが太いお陰で、坂道でも減速せず楽に登ってくれます」

「了解。標的を出すので、破壊して下さい」

「どうやら、特に問題は無いみたいだ。」

「本当か？と疑ったが本人達が良いと言うので、良いのだろうと思う事にした。」

稼働時間も追加装甲で若干伸びたとは言え、2・5時間が限界。

ローラーも最高40km/h辺りが良い所だ。

その上バッテリーの消費も著しく、全力稼働すると10分程で枯渇する。

俺の持つ基準で言えば、正直言って欠陥機？と言う本音だ。

そんな事を考えながら、標的を試験場内に搬入指示を出す。

試験場中央に、砂の入ったドラム缶から破棄予定の装甲車などが搬入される。

準備が終わると、2台のES-X0は猛然と標的に突撃。

1号機はナックルガードを装備し、ドラム缶へ。

2号機はスーパーカーボン製試作近接武装バルディッシュを装備し、装甲車へ。

「うおらあああ！」

1号機が裂帛の声と共にローラーダッシュと機体重量の乗った、見事なパンチをドラム缶に向かって放つ。

パンチを受けたドラム缶は鈍い金属音を放ちながら、中身を撒き散らしつつ試験場の端まで地面を跳ねながら飛んでいった。

「はああああ！」

2号機が裂帛の声と共に柄を延ばしたバルディッシュを構え、標的直前での高速旋回の高遠心力とローラーダッシュと機体重量の乗った一撃を装甲車に叩き込む。

一撃を受けた装甲車は甲高い金属音と共に、前方から後方まで一直線に装甲を切り裂かれた。

「」「」「おおっ！」「」「」

データ計測室に、技研研究者達の歓喜の声が響く。

そしてES-X0は次の獲物は……と言った風情で、次の目標に向かって疾走。

その後2台は次々に標的を破壊し、追加パーツ評価テストは終了した。

「う……ん。 ナックルガードは展開稼動部の強度不足。 バル
デイツシュは柄の伸縮部が強度不足か」

「すみません、オースティンさん。 扱い方が少し荒っぽかった
見たいで」

「すみません……私も」

「いえ。 テストなので、不具合が出る事事態に、問題は無いん
ですよ」

そう、テスト内容自体に問題は無い。

問題はES - X0自体にある。

元が作業用だった事もあり、今回の様な全力稼動攻撃にフレーム
強度が持たなかったのである。

テスト後の検査で、各関節部の負荷が許容値ギリギリと言う結果
が出た。

いや、一部では負荷が限界値を超えている部分も有った。

流石に俺が改造した部分に問題は出ていなかったが、こうなると
基礎フレームから再設計する必要がある。

詰る所……俺の仕事が増えるのだ。

クリスも色々仕込んではあるのだが、まだまだ甘い所も有り最終
的には俺がフォローする必要がある。

「仕方ありません。ES-X0は使い潰す心算で、データ採取をして下さい。根本的な解決は次機で対処します」

鬱だ。

何時に成つたら俺はユツクリと日常を過せるんだ？

(本当に凄い。丸で、体の延長みたいに自由に動く！)

私は今、この鉄の塊に夢中だ。

嘗て夢破れた物が、形を変えて実現したからだ。

私は元々、戦術機のパイロットを目指していた。

しかし、適性検査の段階で基準に満たず、不適合と判断が下された。

そして私は代償物を求め、強化外骨格運用部隊に配属を希望し受理された。

しかし、現物を前に私は失望する事になる。

戦術機とは比べ物に成らない動作の愚鈍さ。

重火器の固定運搬しか、求められない役割。

何もかもが、私の期待を裏切る。

私は半ば腐りながら、軍務をこなしていた。

そしてそんな生活に終わりを告げる、転機が訪れた。

技研への派遣辞令だ。

新型強化外骨格開発計画。

そのテストパイロットに、私は選ばれたのだ。

当初、私は所詮は強化外骨格、新型であっても既存物と大差は無いと思っていた。

しかし、その認識はすぐに覆される。

愚鈍さを感じさせず、体の延長の様に自在に動く機体。

それだけでも、驚愕の一言なのにこの機体はそれ以上だった。

この機体ES-X0の開発者であるオースティンさんが追加パーツを製作し装備させた事で、まるで別の機体の様に変貌した。

ローラーダッシュで試験場内を疾走し、試作近接武装で標的を切り裂く。

ナックルガードを展開し、豪腕を持って標的を叩き潰す。

この機体は、何処までも私は魅入らせる。

(もっと、もっと！ もっと私を楽しませなさい！)

「うわぁ！ な、何だ、今の寒気は！ 何か今、舌なめずりされた様な気がしたぞ？」

第十話 ヌックリする時間が・・・（後書き）

どんなに頑張っても、作業機械は作業機械と言う事ですね。

感想待っています。

第十一話 応援要請は、拒否したいな。(前書き)

お気に入り登録700件突破

有難うございます。

第十一話 応援要請は、拒否したいな。

1983年10月中旬

実戦テストに出されていた、RRX-M02が戻ってきた。

3ヶ月ほど欧州戦線で実戦を繰り返して来ただけあって、テスト段階で想定されていなかった様な使い方もされていた。

10000m狙撃って何だ？

アレは狙撃銃じゃないんだが……。

まあ、そんなこんなでRRX-M02は最終調整は受け、量産されるはこびとなった。

正式名称：RR-M1“サジタリウス”と決まり、GE社が製造販売する事が決定。

これにてRRX開発計画は、一応の終了を見た。

そしてES-X計画、採取されたデータを元に基礎フレームから再設計し直し、全体を再構築したES-X01がロールアウトした。ES-X01は素体としての完成を主眼に置いて開発、ES-X計画のベース機となる予定だ。

「ローズ少尉、ノエル准尉、ES-X01の調子はどうですか？
基礎フレームの強度が上がった分、出力もアップさせたので大分
感触も変わっている筈ですが」

「そうですね。出力が上がった分、色々と無理が利きますね」

「ES-X0の追加パーツが一体になってい分、機体全体の安定性が向上して使い易くなっています」

2台のES-X01は、試験場内を力強く疾走する。

ES-X0をブラッシュアップし人型に近い外観になった恩恵で、ES-X01の関節稼動域は自由度が更に向上し動きにキレが見える様になった。

2号機は主脚による走行から、脚部ローラを稼動させ高速移動形態に移行した。

脚部ローラも、出力の向上の恩恵で55km/hまで最高速が上昇。

ES-X0を上回る速度で試験場を駆ける。

「そうですか。では試験場内に障害物を設置するので、駐機場でバッテリーの交換を行ってください」

「了解」

2台のES-X01は駐機場で、パイロットが自分でバッテリー交換を始めた。

バッテリーは胸部・背部・両腰の4箇所分散配置してある。

敵の攻撃によりバッテリーが破損し、行動不能になるリスクを出来る限り低くする為の措置である。

使用バッテリーの規格は全て共通化し、補給物資の調達の容易化

も計られている。

胸部と背部に各2つずつ、両腰に1つずつの計6つが搭載される。稼働時間もES-X0の2.5時間を上回る、5時間と成っている。

そして2台は、手早くバッテリー交換を済ませた。所要時間、3分半。

使用済みバッテリーを充電装置に戻していなければ、もっと短時間で交換出来ていただろう。

「障害物の設置終了。ES-X01各機は走破テストを始めて下さい」

「了解」

一号機は主脚、2号機は脚部ローラーでコースを走り出す。

設置されたポールの間をジグザグに駆け抜け、車など置かれた障害物を飛び越える。

その後も2台のES-X01は、次々に障害物をクリアしていった。

結果、ES-X01はほぼ人間と同じ動きが可能と言う結果が出た。

そして、ES-X0で発生したES-X01で改善した基礎フレームの強度不足問題の実証試験を行う事にした。

比較の為、前回と同じ標的である砂の入ったドラム缶や装甲車を試験場内に用意した。

「ローズ少尉、ノエル准尉。以前と同じ様に思いつ切り遣ってくれ。近接武装の方も改良しているので、破損はしない筈だ」

「了解した。思いつ切り遣らせて貰います」

「了解です。手加減抜きでいきます」

準備が終わると、2台のES-X01は猛然と標的に突撃。

1号機はナックルガードを展開し、ドラム缶へ。

2号機はスーパーカーボン製試作近接武装バルディッシュ改を装備し、装甲車へ。

「せいやああああっ！」

1号機が裂帛の声と共にローラーダツシユと機体重量の乗った、見事なパンチをドラム缶に向かって放つ。

機体出力が向上し、より強烈に成ったパンチを受けたドラム缶は鈍い金属音を放ちながら、中身を盛大に撒き散らしつつ試験場の壁に地面を跳ね飛びながら激突した。

「はああああ！」

2号機が裂帛の声と共に柄を延ばしたバルディッシュ改を構え、

標的直前での高速旋回の遠心力とローラーダッシュと機体重量の乗った一撃を装甲車に叩き込む。

一撃を受けた装甲車は甲高い金属音と共に、前方から後方まで一直線に装甲を大幅に切り裂かれながら跳ね飛んだ。

「「「おおっ！」「」」

前回を上回る光景に、研究員一同歓喜の声が響く。

その間に、ES-X01は次の目標に向かって疾走した。

全ての標的を破壊し、テストは終了した。

「良好良好。各関節部の負荷も十分許容値範囲内、改良は上手くいったみたいだ」

前回の試験で発生した、基礎フレームの強度不足問題は解消された。

また、以前のテスト時に破損したガードナックルとバルディッシュも、今回の改良品は問題無く機能している。

ES-X01は、最初の試験を良好な結果の内に終了。

後は細かい追試と改良を行い、完成度を向上させる予定だ。

(R R X …… やつと量産に漕ぎ付ける事が出来た)

目の前にある先行量産型 R R - M 1 “ サジタリウス ” を、感慨を持って眺める。

R R X 開発計画に参入して、凡そ一年半。

新規格兵装の実用化期間として考えれば、極めて短期間での開発であつたと言える。

それもこれもひとえに、オースティンさんとシャーロックさんの尽力の結果だろう。

彼等が基礎研究と量産を前提とした設計図を作ってくれていなければ、後5年や10年では実現出来なかつただらな。

それに出来たとしても、もつと非効率で大型化したものだろうがね。

まあ、それは兎も角、R R - M 1 が完成した事は良いのだ。

しかし、実戦テストで R R X - M 0 2 が欧州で活躍した事が原因で欧州各国から、R R - M 1 を輸出してくれと言つ要望が多数寄せられる様になつた。

現在政府も R R - M 1 を輸出する気は無い様だが、何れは輸出する事に成るだろうと考えている筈。

G E 社上層部も同様の判断を下し、R R - M 1 のモンキーモデルを作製と言つ命令が下つた。

だが、此処で問題が発生した。

正直に言つて……どうやったら、モンキーモデルなんて作れるのだろう？

R R X 開発計画で G E 社がした事は、設計図通に部品の作製と組

み立てだけだ。

実質的には、EMLの研究開発ノウハウの蓄積が無いのだ。此処に来て、オースティンさんとシャーロックさんに頼り過ぎていた弊害が表面化した。

RRX開発計画中にする事が無いと言っていた研究員達は今、叫び声を上げつつ頭を抱えている。

皆がRRX-M02と言う物を知っているだけに、お粗末な物を作る訳にもいかない。

その上、オースティンさんとシャーロックさんは現在ES-X開発計画に参加している。

余程の事が無い限りは、手を貸して貰えないだろう。

(オースティンさん！ シャーロックさん！ カンバック！)

「ん？ ハワードさんの悲鳴が聞こえた様な……？ まあ、良い

か。
ハワードさんが仕事中に悲鳴を上げるのは何時もの事だし「

第十一話 応援要請は、拒否したいな。(後書き)

頑張りハワードさん、応援“だけ”はしています。

感想待っています。

第十二話 鉄塊、空を飛ぶ。(前書き)

第十二話 鉄塊、空を飛ぶ。

1983年12月上旬

試験も順調に進み、ES-X01の完成度も次第に高まって行った。

そして、新たに新造されたES-X01用の新しいパーツが技研に届けられた。

新たなパーツ、化学ロケットブースターである。

フレーム強度に余裕が有る為、緊急離脱用として装備する事になった。

化学ロケットブースターを背中に装着した姿を見たローズ少尉とノエル准尉は、ポツリと漏らした。

「何だかコイツ……段々強化外骨格らしく無くなって来ていませんか？」

「むしろ、小さな戦術機じゃ無いんですか？」

「否定できませんね。色々弄っていたら、この形に落ち着いて仕舞ったんですよ」

「店長……だから、遣り過ぎだつて言つたじゃないですか」

黙つてろ、クリス。

良いじゃないか、最近趣味のガラクタ弄りもロクに出来ないんだ。偶には、羽目を外しても。

予算や設備も、国防総省持ちなんだしさ。

「取り合えず、化学ロケットブースターの動作テストをしましよ
う。ES-X専用の銃器系の装備も現在開発中なので、完成しだ
い順次テストをして貰います」

「了解」

二人がES-X01に乗り込み起動、駐機場から屋外試験場に移
動を始めた。

飛行浮遊試験と言う事で屋内試験場が使えない為、以前RRXの
試射に使つた屋外試験場で行われる。

まず初めに、1号機が試験場中央に陣取る。

「ローズ少尉、推進剤の予備は沢山有りますから、出力は少しず
つ上げて下さい。出力調整支援プログラムが無いので、行き成り
スロットルを開くと何処かに吹き飛びますよ」

「了解しました。5%ずつ上げます」

「了解。 飛行浮遊試験開始5秒前・4・3・2・1、燃烧開始」

ロケットブースターのノズルに、炎が灯る。

盛大に噴煙をあたりに撒き散らす、ES-X01の巨体は微動だにしない。

そして徐々に、噴煙と噴射炎が大きくなっていく。

出力が15%を超えた時、状況に変化がでた。

ES-X01の巨体がある場で、浮き上がり始めたのだ。

20%になると、ES-X01は30cm程度だが完全に浮遊した。

「ローズ少尉。 姿勢制御バルンサーは、大丈夫ですか？ 今現在ES-X01は、完全に浮遊しています」

「大丈夫です。 バルンサーに問題ありません。 ただ・・・」

「ただ？」

「推進剤の残量が60%を切っています。 現状維持で後、15分前後の飛行限界です」

予想通り、推進剤の消費が激しい様だ。

内臓推進剤タンクだけだと、出力100%では3分持たずに限界と言う計算になっている。

これでもかなり効率化されているのだが、元が燃料ドカ食いと言う事も有って現状ではこれが限界である。

「ローズ少尉、高度そのまま平行移動を試して見て下さい。残量が10%を切ったら、着陸して下さい」

「了解。 平行移動を開始します」

ES-X01はノズルの角度を調整し、巨体がユックリと前進し始めた。

非常にユックリとした移動だが、姿勢や高度は安定しとても滑らかな動きである。

その後も特に姿勢を崩す様な事にならず、ES-X01の初飛行は成功に終わった。

「ローズ少尉は、推進剤の補給を。 ノエル准尉、試験場中央へ」

「了解」

1号機と2号機が試験場で入れ替わる。

データリンクシステムを使い、一号機で採取されたデータを修正プログラムと組み合わせ、試作支援プログラムとして2号機に組

み込む。

これで飛行制御も、1号機と比べれば少しは楽になるだろう。

「ノエル准尉、支援プログラムを起動させた。飛行制御も楽になる筈だから、出力20%から始めてくれ。最終的には50%まで上げて欲しい」

「了解しました。出力20%スタートで5%ずつ上げていきます」

「了解。飛行浮遊試験開始5秒前・4・3・2・1・燃烧開始」

ロケットブースターのノズルに炎が灯る。

1号機と違い、2号機は順調に浮上し出す。

出力20%で1号機と同じく、30cmほど浮上した。

「20%到達、順次スロットルを開放します」

2号機はスロットルを段階的に開放していき、50%に到達する頃には10m近くの高度に到達した。

そして2号機にも、1号機と同様に高度と姿勢の維持を優先させ並行移動させる様に指示を出す。

出力50%では約5〜6分で稼働限界に達するが、ES-X01の動きは素晴らしい。

安定した動きで、60km/h位の速度で試験場内を飛翔する。
推進剤残量が10%を切る頃に、2号機は着陸した。

「ご苦労様です、ノエル准尉」

「いえ。中々興味深い体験でしたよ」

「それは良かった。こちらも、中々有意義なデータが採取できました」

その後も順調に試験は進み、ロケットブースターのデータ採取を続行した。

そのかきもあり、採取データを修正プログラムと組み合わせた基本的な支援プログラムが完成。

今後データ蓄積を増やしていけば、AMBAC(Active Mass Balance Auto Control:能動的質量移動による自動姿勢制御)と組み合わせ3次元起動も可能になる見込みだ。

……あれ？

何か頑張り過ぎてないか、俺？

趣味が出来なくて、ストレス溜まってるのかな？

(これは……もう、強化外骨格の括りでは無い様な気が?)

RRX開発計画関係で国防総省に出向していて、今日技研に戻ってきたのだが……。

私の目の前に鎮座する物体、ES-X開発計画で製作された機体ES-X01を見上げる。

現在軍に配備されている強化外骨格は四角い箱を組み合わせた様な外觀なのだが、ES-X01は人に近い外觀をしていた。

私見だが、ES-X01は強化外骨格よりも第二世代型戦術機に近い印象を受けた。

研究室に立ち寄り、ES-X0・ES-X01の実働試験映像を見て仰天した。

最早、強化外骨格の動きではない。

人間と変わらない動作を人間の数倍のパワーを持って再現し、様々なオプションを自在に操る器用さ。

データも、従来の強化外骨格を遥かに上回る性能を示していた。

その上、このES-X01は飛行能力さえも備えている。

此処まで来ると、笑うしかない。

これが、新型強化外骨格開発計画?

馬鹿を言え、これは最早小型戦術機開発計画だ!

(オースティンさん……どうやら、私は貴方の事をまだまだ侮って居たみたいです! 貴方は本当に凄い! 貴方なら、きっと!)

「あ〜〜、ガラクタ弄りがしたい。もっと、趣味に費やせる時間が欲しい」

第十二話 鉄塊、空を飛ぶ。(後書き)

趣味の時間がとれず、ストレスと禁断症状で暴走しています。
微妙に自制が緩み、放出する技術レベルが上がっています。

感想待ってます。

第十三話 丸投げと中間管理職の悲哀

1984年2月中旬

ES - X01が、一応の完成を見た。

“素体としての完成”、これがES - X01の開発コンセプトである。

ES - X01は戦闘に使える十分機能を有しながら、“誰にでも短期間の訓練で扱える様になる” “誰が使っても凡そ同じ性能が出る” “様々な用途に使える” と言う条件を満たしている。

事実、現在技研の一部職員もデータ取りの終了したES - X0を技研内限定で、荷物運搬用に使っている。

ES - X0に興味を持った運動神経の良さそうな研究員が“素人がどれ位で扱える様になるのか？” データを取ろうと言い出した事が発端だった。

ローズ少尉とノエル准尉の作製した訓練カリキュラムが出来上がった事もあり、研究員は2週間程でES - X0の基本動作をマスターするにいったった。

ES - X0とES - X01の操縦系はほぼ共通化されているので、ES - X01も同じ結果が出ると考えられている。

そしてES - X01の飛行テスト後に、ES - X用の銃器も順次完成しテストを行った。

・ハンドガン：12・7mm液体炸薬・装弾数35発。（モデル：P226）

・マシンガン：12・7mm液体炸薬・装弾数350発。（モデル：MP5）

・ショットガン：30mm液体炸薬・装弾数25発（モデル：M500）

・アサルトライフル：20mm液体炸薬・150発（モデル：M16）
・スナイパーライフル：12.7mmオートマチック・液体炸薬
+電磁加速併用・装弾数6発。
・アンチマテリアルライフル：20mmオートマチック・液体火
炸薬+電磁加速併用・装弾数6発。
……と言う、ラインナップが揃えられた。
ES-X用銃器は、対小型種を主眼を置いて製造されている。
ES-Xには自在に動く5指マニピュレーターがある為、実際に軍
で運用されている銃器をモデルにサイズアップして製造された。
その結果、ローズ少尉とノエル准尉からは使い易いと言う評価を
貰っている。

「元々軍で使っていた銃器なので、取り回しが楽ですね」

「小型種相手なら、この威力でも十分通用すると思います」

好評な理由は、他にも幾つかあった。

モデル元が堅牢な軍用銃の為、試作兵器らしい脆弱性が余り無かつた事。

ES-X01のパワーで、銃器の反動が極度に抑制されフルオート射撃においても集弾率が高かつた事。

ES-X01のFCSが銃器の照準機構と連動し、照準補正を行い命中率が向上した事。
等などである。

ただし……。

スナイパーライフルとアンチマテリアルライフルの評価は二分した。

ローズ少尉は“高威力且つ射程距離も長い”と高評価を。

ノエル准尉は“高威力だが連射性に不満”と低評価を。

この意見は、ES-X開発陣営にも波及した。

曰く“EML仕様は止め、従来型の装備にすべき”

曰く“EML仕様になれば、大型種の相手も出来る”

曰く“ES-Xの主目標は、小型種駆除がメインだ”

曰く“狙撃援護をメインにすれば、問題は無い”

等等、様々な意見が出された。

結局、議論の結論は出ずにEML仕様と従来型を両方用意する事と成った。

詰る所、問題を運用側に丸投げにしたのだ。

「ES-X01は、ほぼ完成しました。 今後は純軍事用にES

-X02の開発へ進みます」

「オースティンさん……このまま提出しても、良いんじゃないですか？」

「多分、何処からも問題は出ないと思いますよ？」

「又悪い癖が……店長つて変に凝り性ですよね」

言うなよ、クリス。

俺は只、派生機を作ろうとしているだけだぞ？

標準機・指揮官機・長距離支援機・電子戦機・工作機等。

どうせ作るのなら、一度に作っておくべきじゃないか？

開発予算も余ってる事だしさ？

(進まない……研究が……全然進まない)

社の上層部から製作命令が出されてから、早5ヶ月。

モンキーモデルのEML開発が進まない。

最初頃は研究者達も素材を変えれば、性能が落ちて完成すると考えていた。

しかし、そう簡単に物事は進まなかった。

加速コイルの素材を変えれば抵抗熱で溶け落ち。

キャパシターの素材を変えれば蓄積率と放出力が極度に低下、一発分もチャージ出来なかった。

ガスタービンの素材を変えれば発電能力低下し、機材の大型化の上1トンを超えた。

RR - M1と言う完成品が目の前にあって、この体たらく。中間報告を上げに行くたびに、お説教が続き。

研究員に発破を掛ければ、死人の様な表情で凝視される。

RRX開発計画の時には、考えられなかった状況が目の前にある。そして思い出す。

ああ、本来の新規格品開発計画の現場はこんな物だったな……と。

偶に漏れ聞く、ES - X開発計画は順調極まりないらしい。

聞く度に、オーステインさんとシャーロックさんが頑張つて（暴れて）いるなあ〜と思った。

更に又、上層部がES - X開発計画に参入し様としていると聞き達観の域に達して一言。

“オーステインさん印の品は製造は出来ても、自社での新規開発は難しいですよ”……と。

彼等が余りにも簡単に新規格品を作るので誤解されがちだが、新規格品の開発なんて普通は簡単に出来ない。

（お願いですから、オーステインさん、シャーロックさん。手伝いに来てください！）

「そう言えば、工房の家庭菜園ってそろそろ野菜達が収穫頃だつたな。　ハワードさん達を呼んでホームパーティーでも開くかな？」

第十三話 丸投げと中間管理職の悲哀（後書き）

ハワードさん・・・敬礼。

次回も主人公は又、色々やらかしています。

感想待っています。

第一四話 ホームパーティーと農業革命（前書き）

ユニーク5万突破。

ありがとうございます。

第一四話 ホームパーティーと農業革命

1984年2月下旬

家庭菜園の収穫に合わせて、ホームパーティーを開く事にしました。最近仕事が忙しい事もあり、ノンビリ出来なかつたので慰労を含めて知り合いを集めて開く事にしました。

ES-X01が完成して、一息付けたのでローズ少尉とノエル准尉も誘いました。

マクレーン大尉（RRX開発計画の功績で昇進）にも一応声を掛けたのだが、ES-X開発計画の中間報告を国防総省に上げないといけないので、辞退された。

序に爺さんに話を振ると、即座に参加と返答がきた。

最後にハワードさんに連絡を取ったときは、色々な意味で壮絶だった。

泣き声での開発応援要請から始まり、上層への不満に研究員達への不満と1時間以上に渡る愚痴が滝の様に流れ出した。

何とか宥め透かし落ち着かせてパーティーへの出欠を問うと、とても疲れた様子で出席の意思を伝えてきた。

……ハワードさんには、お土産を用意しておこう。

「ようこそ、我が家のホームパーティーへ。色々料理も用意させて頂きましたので、ご堪能下さい」

俺は主催者として、皆を前にしパーティー開幕の挨拶。
今回のパーティーは立食形式を採用し、料理は全て俺が作った。
一流料理人の技能データを使用し調理したので、味は保障できる。
現に……。

「うをおおお、何だこれ!? 滅茶苦茶美味いぞ!」

「あら……、本当に美味しいわ!」

「ほおお、これは美味しいのう!」

「ううう……美味しい。本当に美味しい」

「相変わらずの腕前ですね、店長」

上から、ローズ少尉・ノエル准尉・爺さん・ハワードさん・クリスの順だ。

皆の表情を見る限り、料理の味には満足そうだ。
皆夢中で食べている。

一人平然としているクリスには、バイト中の賄として何度も作ってやった事があるからだろう。

「オースティンさんが、こんな特技を持っていたなんて知りませんでしたよ?。」

ハワードさんが料理を賞賛すると、皆賛同する様に頷く。

「特に、この野菜サラダの美味しさといったら絶品ですよ。」

ノエル准尉が野菜を褒めてくれる。

いや、苦勞して作った甲斐があったなあ。

「そう言つて貰えると嬉しいですね。この料理に使われている野菜は、家の自家製なんですよ。」

「オースティンさんは、家庭菜園も持っているんですか? 工房の近くには、畑なんか有りませんでしたよ?。」

良く見ていますね、ローズ少尉。

確かに、土がある畑は有りませんよ。

「工房の裏に、3階建ての倉庫がありましたよね? アレが畑ですよ。」

「『『『はあ？』』』」

何か皆の顔が面白い事に。

あつ、クリスマス！

そのローストビーフ、俺も狙ってたのに。

その後結局、どう言う事だ？と言う事になり、皆で畑見学に行く事になった。

「これが家の畑です」

「『『『……』』』」

……沈黙が痛い。

あれ？もしかして俺……また何かやっちゃった？
改めて畑を見る。

青々と実った葉菜。

黄金色の穂先は重々しく頭を垂れ。

瑞々しい実を付けた果菜。

大粒の実を付けた根菜。

香り豊かなハーブ類。

様々な野菜が、元気良く育っている。

うん、問題無い。

初めて作った完全閉鎖型植物工場にしては、上手く育っていると
思うのだが。

やっぱり、ギャラクシー特製の養液は効果抜群だな。

重力調整が出来ないから、大丈夫かと心配したものだ。

ギャラクシーの工場設備を完全再現は出来なかったが、2・3週間程度で収穫可能になるから上出来だと言える。

「これ……家庭菜園ですか？」

「そうですね。……もしかして、これは一般的ではないと？」

「」「」「うん」「」「」

皆が一斉に頷く。

ああ……なにか又、嫌な予感が。

その後は皆に色々聞かれたので、質疑応答の時間となった。

Q：何時この畑？を作ったのか？

A：RRX開発計画の時の拡張工事の序に。

Q：この設備は？

A：ガラクタの再利用です。

Q：空調や照明の電源は？

A：自作の太陽光発電と風力発電、後下水を利用したマイクロ水力発電。

Q：どれ位の種類の野菜が栽培されている？

A：15～20種程。

Q：どの位の期間で収穫が可能になるか？

A：品目によるが、大体2～3週間前後で収穫可能。

Q：コストは？

A：さあ？

まあこんな感じで、パティ後半は過ぎていった。

時間も経ち、パーティーもお開きになったのでお土産を折り詰めて来客者に配った。

このお土産に、特に喜んだのはハワードさん。

ハワードさんにはオマケとして、RR開発指南書を渡しておいた。これを読み理解すれば、RR-M1クラスなら開発出来る様になる……と、思う……多分。

元は3年前に、クリスの勉強用に作製した物だし。

ハイスクールの生徒が理解出来るのだ、優秀なGE社研究員なら大丈夫……多分。

「始めまして、オースティンさん。 私は、農務省の“リーラ・エドワーズ”です」

嫌な予感的中。

パーティーから3日後、招かざる客が来た。

あのく〜、帰って貰えませんか？

無理？……やっぱり。

(この人が噂の“ブルース・オースティン”さん。 国防総省と国務省が注目している)

彼が注目され始めたのは、大体2年程前。

技研から上げられた報告書が始まりだ。

今現在軍が配備を進めている、量産型RRの元を作り発展させた人物だ。

国防総省からは、軍の戦力増強に尽力した人物として。

国務省からは、強力な外交カードを提供した人物として。

両省から注目される、重要人物だ。

しかし、彼の活動はそれだけに留まらなかった。

詳細は不明だが、今現在彼が関わっている開発計画に国防総省と国務省が共同で防諜体制を敷いているらしい。

普通では有り得ない事だ。

彼は一体何者だろうか？

そしてつい先日、国防総省と国務省が俄に活気付いた。国防総省の同期から漏れ聞いた噂によると、待っていた報告書が上がってきたとの事だ。

一体どう言う報告書だったのだろうか？

そして今日。

私は上司と共に、副長官室に出頭した。

そこで、伝えられたのが噂のオースティン氏の事だ。

何でも彼が、画期的な農法を開発したので共同開発で実用化に向け進めようと交渉をして来いとの事だ。

その際、くれぐれも失礼が無い様にと念を押された。

本当に、彼は何者だ？

私は彼の工房にやってきた。

最近では陸軍技術研究所の方に居る事が多いそうなのだが、今日は工房の方に居るとの事でこちらに来た。

工房に入ると、奥から一人の男性が現れたので挨拶をすると彼がオースティン氏だった。

少し世間話をした後、本題の農法の事を聞くと彼は深い溜息をしつつ畑？に案内してくれた。

私は初め、目の前に広がる光景が信じられない思いでいた。

色取り取りの野菜が規則正しく並び、一面を埋め尽くしている。

その後、彼に詳しい事を聞くと更に驚かされた。

目の前に広がる光景を、2 3週間で再現可能だそうだ。

それも、年に十数回も。

副長官が、くれぐれも失礼の無い様にと言った訳が良く分かった。確かに、これを手放すのは余りにも惜しい。

私は早速、彼に実用化へ向けた共同研究を申し込んだ。

それに対し彼はと言う訳か、妙に疲れた感じの表情で協力要請を受諾してくれた。

(少し引つかかるが成るほど、確かに彼なら国防総省も国務省も重要視する筈ね)

「また……仕事が増えた。何に、この負のスパイラル？」

第一四話 ホームパーティーと農業革命（後書き）

家庭菜園のはずが・・・。

感想待っています。

第十五話 派生機仕様決定とお勉強（前書き）

第十五話 派生機仕様決定とお勉強

1984年3月上旬

面倒だったので、農業関係技術は養液の製造方法から空調や温度等の資料をエドワーズさんに渡した。

様は丸投げだ。

技術資料が有っても、実験施設を建設し実証試験を行ない安全性の確認やコスト算出をしないといけない。

多分、実用化には2・3年は掛かる筈だ。

初めは農務省に文句を言われたが、数日が過ぎるとピタリと止んだ。

エドワーズさん曰く、二対一は卑怯との事だ。

何の事だ？

まあそれは良いとして、ES-X開発計画だ。

ES-X02基本仕様が決まった。

派生機としては、標準機・電子戦機・工作機の3機種が製造される事になった。

標準機：ES-X01にハードポイントを増設、追加パーツと追加武装による汎用性の向上。

電子戦機：ES-X01をベースに、各種観測装置の増設とデータリンク機能強化による部隊支援能力の向上。

工作機：ES-X01をベースに、補助腕と装甲表面に外付け油圧アクチュエーターユニットを増設して馬力の向上。

と言うコンセプトで、派生機は設計製造される。

他にも指揮官機・長距離支援機・近接戦機・重砲撃機等と言うのも考案された。

「標準機は、少しの改良で済むので1週間もあれば完成します。

電子戦機は観測機器や通信システムの追加等があるので、1ヶ月位掛かりますね。工作機は補助腕と外付け油圧アクチュエーターユニットと連動制御システムの追加に2週間は欲しいですね」

「標準機は分かりますが、電子戦機と工作機は分ける必要があるのですか？」

ローズ少尉の疑問も最もだろう。

ES-Xは汎用性が最大の売りだ。

「電子戦機は各種観測機器を追加搭載するので、システムの処理機能を向上させる必要も有るんですよ。その上、ES-Xはジェネレーター非搭載のバッテリー駆動機なので、電源に余裕が無いんです。知ってますか、電子機器って意外と電気食うんですよ？」

ES-X01の電源のまま搭載予定の装備をフル稼働すると、1.5時間駆動するのがやっと。専用バッテリーに追加演算ユニット、機材の冷却機器に通信ユニット。標準機に全部搭載する位なら、専用機を作って完成度を上げた方が良くないですか？」

「えっと……確かに、専用についた方が良さそうですね。工作機の方は？」

「ES-X01の駆動系は、モーターと電磁伸縮炭素帯のバイナリ式電気駆動です。主に追随性と瞬発性を重視した構成ですね。ただし、これには欠点もあり高荷重が掛かった状態では、駆動が極めて困難になる可能性が出てきます。工作用と考えれば、多少動きが鈍くなっても高荷重に耐える仕様に変更した方が良いでしょう。更に外付けにして置けば、イザと言う時にはパージして戦闘行動が出来ますからね。補助腕は、精密作業用ですね」

「成るほど」

納得して貰えて良かった。

何と言っても、彼らには三機種ともテストして貰わないといけな
いからな。

馬車馬の如く働いて貰う必要がある。

それとも、追加パイロットを頼むべきかな？

「そう言えばローズ少尉、ノエル准尉。電子機器の扱いは得意
ですか？」

「いえ。俺は余り得意ではありません。一応、使えるって程

度です」

「私も、其処まで得意ではありません」

そうですか、そうですか。

成らば、勉強しましょう。

何、一週間もあれば立派な電子戦のプロに仕立て上げて見せますよ。

「そうですか。では標準仕様のES-X02が完成するまで、電子機器操作の集中講義を受けて下さい」

「はい」

「て、店長……。ア、アレを遣るんですか？」

クリス……。そんなに怯える事は無いだろ？

ただ単に“集中”講義を行うだけだぞ？

昔、お前が受けた事がある講義を内容を劣化させて。

「「？」」

見ろ、クリス。

二人が不思議そうな顔をしているではないか。

何、二人が気にする事では無いですよ。

直に、そんな余裕は無くなりますから。

(……分からない。 この開発指南書の内容が分からない)

先日オースティンさんの工房で開かれた、ホームパーティーのお土産として譲って貰った開発指南書。

これこそ、開発が難航している研究員達への起爆剤になると思っていた。

しかし、そう都合良く事は運ばなかった。

指南書の難易度が、極めて高かったのだ。

基本の理論は世間に流れている、コイルガンの理論と同じなのだが。

指南書にはそれを元にした、独自の理論が記載されていたのだ。

その理論がこれまた、極めて高度な科学知識を基にした理論なのだと推察できる。

指南書を貰った時はこれで開発も進むと思っていたのだが、この指南書を見る限り設計図通に作っているRR-M1とは、私が思っていた以上に高度な科学技術の塊だったのだと改めて思った。

大体この指南書を読み解くには、まず技術者よりも先に学者を頼

る方が良さそうだ。

何、この数式？

見た事も無いんだが？

更に本体以外の周辺機器であるキャパシターやガスタービンも、同系列の理論で構成されている。

(オースティンさん。 これ……私の手には余りそうです)

「オ、あ、皆でお勉強しましょう。 何……慣れれば簡単ですよ？」

第十五話 派生機仕様決定とお勉強（後書き）

お勉強って大事ですよね？

ハワードさん……ナム。

感想待っています。

第十六話 ロールアウト（前書き）

お気に入り登録900件突破。

有難うございます。

第十六話 ロールアウト

1984年4月中旬

ES - X02は無事に3機種ともロールアウトした。

各機には、ロールアウトと共に開発ナンバーが割り振られた。

標準型：ES - X02A。

電子戦型：ES - X02B。

工作型：ES - X02C。

現在はES - X02Bのテストが屋外試験場で行われている。

ES - X02B一号機は増設された両肩の複合レーダーユニットを展開し、広域探索を行う。

レーダ索敵範囲は、最大出力で凡そ15kmに及ぶ。

複数の目標を識別し、種別と脅威判定を行い警告を発する。

高性能化された分、パイロットの処理する作業量は膨大な数になるが軽減対策としてES - X02Bには音声認識型の簡易AIが搭載されている。

パイロットが口頭により命令すれば、AIが自動処理し迅速な作業が可能となっている。

「2号機、9時方向・距離3000・速力90で3体接近中、a1・a2・a3と呼称。スナイパーライフルで撃破してくれ」

「了解。狙撃準備に入ります」

「A I、衛星リンク開始。衛星情報とレーダー情報を照合し、目標の現在位置を精密算出。完了次第、2号機にデータ転送」

《了解。……………リンク完了……………照合完了……………現在位置算出。転送します》

「データ受信。狙撃開始します」

ノエル准尉の乗るE S - X 0 2 A 2号機はスナイパーライフルを構え、1号機より転送されて来たデータをF C Sに入力して最終補正を掛け……………発砲。

放たれた弾丸は、一直線に目標へ向けて飛翔。数瞬後、弾丸は目標を貫き破壊した。

「こちら2号機、a 1を撃破。続けてa 2・a 3を撃破します」

2号機のスナイパーライフルは、続け様に火を噴く。数瞬後には、初めの目標と同じ様に吹き飛んだ。それと共に、試験場内にサイレン音が響く。

「全目標の撃破を確認。お疲れ様、試験終了です。所定の位置に機体を戻して下さい」

「了解」

指示された2台のES-Xは機体をハンガーに戻し、パイロット達は管制室の方に歩いてきた。

ローズ少尉がふら付き顔が悪いが、また情報酔いだろうか？

ロールアウトしたばかりのES-X02Bのシステム面は、未だ未完成な部分がある。

初搭乗の時等、搭乗3分で2人とも情報過多で吐いた。

網膜投影システムに無数のウィンドウが開いて、脳が情報処理し切れなかった為だ。

その為に急遽、俺が自作した音声認識型簡易AIを搭載した。

かなり負荷は軽減された筈だが、まだシステムの最適化には時間が掛かりそうだ。

「大丈夫ですか、ローズ少尉？」

「ええ、何とか。前に比べれば、かなり改善されています」

今回の試験は、ES-X02BとES-X02Aとの連携テスト。

ES-X02Bの観測したデータを元に、ES-X02A狙撃装備で目標を撃破するという内容だ。

結果は概ね良好。

実弾SR：距離3000mで目標誤差+-20cm以内。

実弾AR：距離4500mで目標誤差+-30cm以内。

E M L S R : 距離 7 0 0 0 m で目標誤差 + - 1 5 c m 以内。
E M L A R : 距離 9 0 0 0 m で目標誤差 + - 2 0 c m 以内。
と言う結果が出た。

「ノエル准尉、E S - X 0 2 A のデータリンク観測射撃はどうですか？」

「概ね良好です。今後 F C S の性能が上がれば、データリンクのみでも命中精度は更に向上しますね。ですが現状で確実に命中させる為には、パイロットが最終補正を掛ける必要がありますね」

「まあ、現状ではそうですね。F C S 成熟には、もう少しデータ収集が必要ですね」

大型や中型の B E T A 相手なら問題無い命中精度なのだが、小型種が相手に成ると少し命中精度が荒い。

最終的には、データリンクのみで + - 1 0 c m 以内の誤差を目標にしたい。

小型種相手に今の命中精度だと、中心線上以外に照準すると外れる可能性がある。

「両機共に、完成度の向上が必須ですね。それに比べて、E S - X 0 2 C は順調その物なんですけどね」

「ええ。運動性は低下しましたが替わりに、馬力出力がかなり向上しています」

「ES-X01では無理だった重量物も、ES-X02Cなら軽々運搬出来ますからね」

幸い、アクチュエータ連動制御システムも上手い具合に動作してくれている。

これが上手く動いてくれないと、動作その物が阻害されて立つ事さえ不可能だ。

外付け油圧アクチュエータユニットにより、ES-X02Cの馬力出力はES-X01の凡そ1.4倍になる。

高荷重状態での動作も、ES-X01の凡そ2倍の荷重まで動作可能に成っている。

「ただ……」

「ただ？」

「何で、標準装備がスコップなんですか？」

そう、ES-X02Cの標準装備にはスコップが採用されている。工作機と言う事もあり、スコップを装備させた。

他に標準装備としては、腕部ワイヤーガンを装備としている。

「スコップは掘ってよし・叩いてよし・突き刺してよしと、三拍子揃った万能器具ですよ？ 工作機用と考えれこれ以上の装備は無いと思いませんか？」

「はあ、まあ……そうかと」

「そうですね」

2人とも何だか、微妙に納得いって居ないようだな。
しかし、スコップは外せないな。
あれは、良い物だ。

（この農法の生産性は凄まじいわね。 僅か1月で2度も収穫が可能とは……）

農務省ではオーステインさんから譲って貰った技術資料を基に、小さな実験施設を作りました。

貨物コンテナを改造した、完全閉鎖型植物工場の簡易実験施設です。

室内を照らす蛍光灯などの人工光源。

室内の温度を調整する空調機。

室内の湿度を調整する除湿機や加湿器。

棚状に並べられた、生い茂る作物達。

そして新型農法の要、棚一杯に満たされた養液。

これらが施設の中に収まっています。

実験施設が稼動し始めて、約一ヶ月。

その間に生産された作物は2度収穫され、3度目の育成が行われています。

従来の農法の数十倍に達する生産速度。

その上、収穫された作物は各種検査を行っていますが、今の所は全く問題は有りません。

品質も、無農薬栽培の天然作物と比べても、なんら遜色は無い出来です。

寧ろ、栄養価では天然物に勝っている作物まで出てきている位です。

また味の方も、2度目の収穫時に収穫された作物を調理して研究員全員で試食しました。

感想は、美味しいの一言です。

栽培された作物を総合判定すると、極上の天然作物と比べても遜色無しでした。

ただし、問題が全く無いと言う訳でもありません。

最大の問題は、生産コストです。

この生産性を維持するには、作物にとって最適の環境を整える必要がある為、24時間空調等の設備はフル稼働しています。

その為に光熱費等の諸経費を含めると、作物の販売価格は通常の

数倍〜十数倍に跳ね上がります。

（このコスト問題が解決しないと、農法の実用化は程遠いわ……
はあ）

「あつ……プログラミング、ミスった。 AI基礎プログラム……
ゼントラ言語混ぜて書きちゃった」

第十六話 ロールアウト（後書き）

情報酔い、経験無いですか？

感想待っています。

登場メカ紹介（前書き）

登場順に追加します。

ES - X01を追加。

登場メカ紹介

R R X - M 0

1981年登場

M2をベースにリニアライフル仕様に改造を施した品。

口径12.7mmのタンゲステン製の硬芯炸裂鉄鋼弾を使用。

電磁加速と液体炸薬によって秒速2km超の初速で打ち出す事が出来る。

冷却系は水冷式を採用。

キャパシターは一発分の容量で、充填に1分前後必要。

電源は車両エンジン直結のダイナモを回し発電する。

20発ほどで砲身の廃熱が追い付かない様になり、射撃不能となる。

R R X - M 0 1

1982年登場

R R X - M 0を軍用部品を使って改修して品。

水冷+ガス冷の冷却系に変更。

加速用コイルと砲身冷却に20秒掛かる。

エネルギーキャパシターは三発分の容量に増加。

発射サイクルは毎分3発に向上。

キャパシターを2基設置し、交互にチャージしながらの射撃ならば同一サイクルでの連続射撃が可能。

R R X - M 0 2

1983年登場

R R X - M 0 と R R X - M 0 1 から採取したデータを元に、全面新設計したりニアライフル。

本体全長2000mm・重量25kgの四砲身回転ドライブ式。

5秒に1発のサイクルで毎分12発で発射が可能。

小型大容量エネルギーキャパシター（6発分）×2

冷却液タンク（20?）

小型ガスタービン発電機

発電機用燃料タンク（20?：一時間分）

総重量は100kg近い。

キャパシターのフルチャージには30秒程必要となる。

液体炸薬と電磁加速を併用し、弾丸を射出する。

初速：2400m/s } 2800m/s

射程距離：5000m } 7000m

装弾数：1帯120発（ベルト給弾）

多数の弾薬に複数の周辺機器に本体重量だけで25kgと言う、生身の人間一人での行動と運用は不可能である。

試作RRX - M02搭載汎用輸送車

1983年登場

RRX - M02を、次期汎用輸送車の試作車両に搭載したテストタイプ。

欧州戦線に実践テストとして持ち込まれ活躍。
活躍に比例し、欧州各国からの問い合わせが殺到している。

RR - M1 “サジタリウス”

1983年登場

RRX開発計画の完成品。

スペックはRRX - M02とほぼ同等。

欧州戦線でのデータと戦訓が反映され改良されている。
現在、先行量産型が順次生産されている。

ES - X0

1983年登場

工房でクレーンやリフトの代用品として使っていた強化外骨格。技研で破棄されていた基礎フレームを拾い、工房に持ち帰りチマチマ改造したもの。

操縦系を後追いのマスター・スレイブ方式からEX-ギアの先行行動筋電位観測方式に変えた。

搭載プロセッサを増やして並列処理速度を上げた。

既存の強化外骨格を遙かに上回る追随性と運動性、繊細かつ自在に動く五指マニピュレータが売り。

外装イメージ：フルメタのM6をベースに、無骨さを増した感。

ES-X01

1983年登場

ES-X0を基礎フレームから再設計した強化外骨格。

フレーム強度を大幅に向上させ、ES-X0の追加パーツを一纏めにした。

外装が人型により近くなった為、関節稼動域の自由度が向上した。複数のバッテリーを搭載し、稼働時間を延長した。（6機搭載：5時間稼動）

フレーム強度の向上により、緊急離脱用化学ロケットブースターを追加装備した。（最大出力で5分稼動）

姿勢制御支援プログラムの完成により、短時間ながら空戦も可能。

外装イメージ：米国仕様M9。頭部をデュアル式に変更。

ES - X 専用銃器

- ・ハンドガン：12・7mm液体炸薬・装弾数35発。（モデル：P226）
- ・マシンガン：12・7mm液体炸薬・装弾数350発。（モデル：MP5）
- ・ショットガン：30mm液体炸薬・装弾数25発（モデル：M500）
- ・アサルトライフル：20mm液体炸薬・150発（モデル：M16）
- ・スナイパーライフル：12・7mmオートマチック・液体炸薬・装弾数15発。（モデル：PSG-1）
- ・アンチマテリアルライフル：20mmオートマチック・液体火炸薬・装弾数15発。（モデル：M82）
- ・スナイパーライフル：12・7mmオートマチック・液体炸薬 + 電磁加速併用・装弾数6発。（モデル：PSG-1）
- ・アンチマテリアルライフル：20mmオートマチック・液体火炸薬 + 電磁加速併用・装弾数6発。（モデル：M82）

第十七話 試験中隊創設

1984年6月下旬。

クリスが、ハイスクールを卒業した。

彼女の卒業記念パーティーは、開発計画などで知り合った皆で盛大にお祝いを行なった。

中には、クリスがハイスクール生という事を知らなかった人もいたみたいだ。

パーティーはかなり派手になったのだが、クリスも嬉しそうにしていたので問題ないだろう。

唯気に成る事が……プレゼントの中に“〓省・〓省一同”という物が混じっていた。

それと、気になるクリスの進路なのだが。

彼女は、就職を希望した。

周りの人達は、進学をしたらどうかと彼女に進めていたが、彼女の“店長の下で学ぶ事以上の事を、大学で学べるんですか？”という一言に沈黙した。

……おい、何でそこで押し黙る？

まあ、そんな遣り取りが色々合った後、クリスは正式にウチの工房に就職した。

それはさて置き、ES-X02シリーズが完成した。

ES-X02AはFCSの性能向上が目標値に到達、各種追加パーツとの連動も好調。

ES - X02Bは管制システムの最適化が完了、専門の操作講習を受ければ十全に稼働可能になった。

ES - X02Cは連動駆動システムを最適化、稼働時間の延長に成功。

これに伴い、ES - X02各機は評価試験を受ける事になった。評価項目は凡そ300項目。

以前のRRX開発計画の様な偏執的なまでの項目数はなかったが、三機種もあるとかなりの時間がかかる。

う……ん。

よし、最終的には実戦テストも行うのだ、あと何名かパイロットを追加して貰おう。

幸いES - Xは余程の不器用者でもない限り、2週間もあれば使える様になる。

ローズ中尉とノエル少尉を中心として、A型2機とB型2機の1小隊を組んでもらうか。

C型は、拠点の設営と周辺警備かな？

そう思って、要請を出したら思いも寄らない方向に進んだ。

「そう言う事なので、ローズ少尉とノエル准尉。おめでとう御座います、昇進です」

「何が……と言う訳ですか？」

「行き成り昇進と言われても……」

二人とも困惑していますね。

まあそうでしょうね、ですがこれは決定事項です。
マクレーン大尉（R R X計画の功績で昇進）にパイロット増員を
お願いしたら、こう言う話になってしまいましたから。

国防総省から正式に、E S - X試験中隊を創設し後の教導部隊と
して運用すると通達が出たのだ。

A型3機・B型1機で一個小隊を構築し、2個小隊を結成。

C型4機で1個小隊を結成。

合わせて3個小隊、1個中隊を結成すると。

「追加のパイロットは、明日到着します。面倒を見てあげて下
さいね、ローズ中尉・ノエル少尉」

「……………了解」

何か嫌そうですね。

昇進したんだから、喜んで下さいよ。

給料は増えますよ？

まあ、書類仕事は増えますが。

次の日、追加の人員が技研に着任した。

今回追加される人員は10名だ。

少し人数が多いので、彼等は技研の小会議室に集められた。

内訳としては、男5女5だ。

「ダリル・ゴードン」少尉以下9名。現時刻を持ちまして、ES-X開発計画試験中隊に配属と成りました。宜しく願います」

「ご苦労様です、ゴードン少尉。こちらが貴方達の所属する、試験中隊中隊長の“ギルバート・ローズ”中尉。そして彼女が同副隊長の“シャロン・ノエル”少尉です。この後の詳しい事は、ローズ中尉から説明を受けて下さい。中尉、後はお願いします」

「了解しました。諸君、私が君達の隊長を勤める“ギルバート・ローズ”中尉だ。これから君達には、ES-Xの基本操作講習を受けてもらう。その後に、専用装備の操作講習を受けて貰う」

「副隊長の“シャロン・ノエル”少尉です。現在皆さんが搭乗する機体は、現在急ピッチで製造されています。製造中の機体は凡そ1月後には、全機ロールアウトの予定です。実戦テスト以外の評価試験終了後、連携訓練等を行います」

取り合えず、顔合わせはこんな物だろうな。

この後の予定としては、隊員分の機体が完成するまでは訓練と講習と評価試験がメインになる。

追加製造予定はA型4機・C型2機、それと各機の予備部品だ。

生産ラインが確立されていないので、製造に1月は掛かる見込みだ。

はあ、何か大所帯に成ったなあ。

(これがES-X02A……。私は夢を見ているのか?)

私は今、目の前で繰り広げられる光景を啞然とした顔で見ている。強化外骨格は愚鈍・ドン亀・鉄の棺桶等と呼ばれている様な代物である。

その強化外骨格が、地を駆け、銃を撃ち、空を飛ぶ。信じる事が出来ない光景だ。

今回、俺達は軍の命令で技研に向向している。

技研で開発中の新型強化外骨格のテストパイロットをする事、それが大まかな命令内容だ。

何でも既に2人、テストパイロットとして出向しているとの事だ。出向命令を貰った時は、一般工兵出身の俺が何故?とも思った。

しかし思い返してみると、機械化工兵隊が工兵用に改修した強化外骨格を運用している。

それだけに、出向命令は尚疑問が沸いた。

技研に出頭すると、自分を含めて10人の男女が小会議室に集められた。

待ち時間の合間の雑談で、強化外骨格の操縦経験者が一人もいない事が判明。

ある者は空挺出身、又ある者は情報中隊出身、若しくは自分と同じ様に工兵出身と、皆バラバラで統一感の無い人員が揃えられていた。

テストパイロットならば、操作経験者から選抜されるべきだと思うのだがな。

そうこう皆で議論していると、3人の男女が入ってきた。

白衣を着た青年と、作業服を着た二人の男女だ。

彼等の説明を聞いていると、作業服の男女が新しい上官に成るらしい。

それと白衣の青年は、新型強化外骨格の設計主任との事だ。

口頭説明の後、実物を見に皆で格納庫へと足を向けた。

ハンガーに固定されている機体を見た時の第一印象は、小さな戦術機だった。

既存の強化外骨格のシルエットから大きく離れ、より人型に近い姿をしている。

そして、格納庫のハンガーには5種類の機体が固定されていた。

隊長の説明によると、ES - X0・ES - X01・ES - X02

A・ES - X02B・ES - X02Cとの事だ。

隊長達がES - X02Aに乗り込み、デモストレーションを開始した。

主脚による走行。

脚部ローラーによる高速移動。

ロケットブースターによる空中機動。

四肢を用いた格闘戦。

銃火器を自在に扱う銃撃戦。

(これが本当に強化外骨格の動きだとは思えないな)

「え？ 新人歓迎パーティーを開くから、料理を作ってきてくれ？」

第十七話 試験中隊創設（後書き）

試験中隊を作りました。

部隊運用の試験も担当します。

感想待っています。

第十八話 試験中隊始動（前書き）

お気に入り1000件突破

有難うございます。

第十八話 試験中隊始動

1984年8月中旬。

ES-X開発計画試験中隊は十分に機能していた。

7月下旬には、全隊員に機体が行渡り順調に試験項目を消化していった。

試験中隊は、ローズ中尉が小隊長のレッド小隊・ノエル少尉が小隊長のブルー小隊・ゴードン少尉が小隊長のイエロー小隊で構成されている。

試験中に幾つか細かい改良点は出たが、基本的に簡単な改修で済んだ。

基礎的な試験は全て終了し、レッド小隊とブルー小隊は武装を使用した試験を行っている。

レッド1は、ハンドガンを両手に構え標的を走りながら標的を打ち抜き。

レッド2は、ショットガンを腰ダメに構えて打ち放つ。

ブルー1は、マシンガンで空中から弾をばら撒く。

ブルー2は、アサルトライフルを高速移動しながら連射する。

レッド3とレッド4・ブルー3とブルー4は、連携しながらEM

LSR・EMLARの弾丸を遠距離目標に叩き込む。

その横で、イエロー小隊は陣地作製の土木工事をしていた。

イエロー1は、スコップで塹壕を掘り。

イエロー2・イエロー3は、プレハブ小屋を建て付け。

イエロー4は、模擬防衛火器を備え付けていた。

「評価試験も順調順調、このペースならあと半月もあれば実戦テスト以外の項目は消化しきれれるかな？」

「店長。その前にES-Xの製造企業の選定が有りますよ？」

「……忘れて居たかったんだがなあ、その話題」

ES-X開発計画完遂間際の今、量産に伴う担当企業の選定が行われていた。

現在、3社ほどが名乗りを上げている。

“マクダエル・ドグラム社”・“ノースロック社”・“ジネラルエレクトロニクス社”の3社だ。

戦術機の開発企業であるMD社とNR社、RRの量産を担当しているGE社。

縁がある企業と言えばGE社なのだが、既にRRの量産を担当している。

新技術の独占と言う事ではないが、余り特定の企業に集中するのは考え物だ。

なので選ぶとしたら、MD社かNR社である。

MD社は現在、次期主力機F-15Cの生産を担当している会社だ。

米軍としても、F-15Cの早期配備を考えているだろう。

と言う事は、現状MD社の生産力の大半はF-15C建造に割り振る事になる。

其処に新規格のES-Xの製造ラインを作るのは、至難の業だろう。

すると、残るのはNR社である。

F-5と言う戦術機開発製造経験があるが、現在各国にライセンス生産が推奨され米国本土の生産ラインには空きがある。

これを上手く使えば、新規格のES-X製造ラインを作る余裕はある。

「……担当企業に、NR社を推薦しておくかな？」

「GE社じゃなくて、良いんですか？」

「これ以上、ハワードさんに無理をさせるのもどうかと思うんだが？」

ハワードさんの事も、GE社を担当企業の推薦から外した理由の一つだ。

何でも最近、体重が10キロも落ちたと連絡を受けた。

モンキーモデルRRの開発が難航しているそうだ。

新開発したエネルギーキャパシターが、一発撃つと抵抗熱で溶解するらしい。

どうやら、指南書の解読に失敗したらしい。

「そうですね」

「NR社でも、ES-Xの量産に関して問題は無いと思うんだが？」

「量産する事自体は可能なのですが、NR社もGE社と同じ事をするんじゃないんですか？」

ああ。

契約の事を言ってるのか。

今回は、大丈夫だと思うぞ？

「国防総省が契約の仲介に立ち会うそうだから、今回は大丈夫だと思うぞ」

「そうですね、良かった」

クリスも安心したみたいだな。

まあ、そう何度も経営陣の退陣劇なんかやれないからな。

それと今回何故か、国防総省も積極的に仲介で参加させて欲しいと言ってきた。

どう言う心境の変化だ？

GE社の件は、ばれる筈は無いんだがな。

とに角、国防総省にマクレーン大尉経由でNR社を担当企業に推薦して置いた。

それに対しての反応は早く、次の週にはNR社がES-X量産担当企業に決定した。

そして……。

「始めまして、ノースロック社から参りました、ES-X開発計画主任担当者の“ロブ・スタイナー”です。オースティンさんとシャーロックさんですね？ お噂はカネガネ伺っています。今後とも宜しくお願いします」

噂って、何のことだ？

(ES-X計画か……。)

目の前で繰り広げられる評価試験の様子を見ると、無性に悔しくなる。

何故、もっと早くから関われなかったのかと。

ES-Xは既存の強化外骨格所か、戦術機以上の動きを見せている。

確かに展開行動範囲や稼働時間に防御力などサイズに比例した物だ。

機体性能で見れば、戦術機に圧倒的に負けている。

しかし基本的な反応速度や追隨性、操作の簡易さなどは戦術機なと比べ物に成らない程の完成度だ。

ES-Xと戦術機を比較すると“兵器”としての完成度はES-Xに軍配が上がる。

“誰でも短期間で扱っ事が出来る”
“誰が使っても同じ性能が発揮できる”
“一定の性能を容易に維持できる”
何時の時代でも、良い兵器の条件は変わらない。

・ 戦術機が一通り扱える様になるには、最低でも数ヶ月は掛かる。
・ ES-Xは、2週間も訓練すれば十分に動かす事が出来る。

・ 戦術機は操作が複雑且つパイロットの適正に大きく依存し、皆が平等に機体性能を引き出すのは難しい。

・ ES-Xはパイロットの動作をトレースする為、余程不器用でもない限り機体性能を引き出すのはさして難しくない。

・ 戦術機は専門の教育を受けた整備兵が長時間掛けて整備する必要がある、維持費も高額だ。

・ ES-Xは中枢部以外は整備講習を受けたパイロット自身が簡易整備可能であり、維持費も戦術機に比べれば安価である。

兵器として機体を比べれば、ES-Xは戦術機を圧倒的に凌駕している。

これは、兵器を運用する側からすると圧倒的なアドバンテージに成るからだ。

故に、この計画の存在を今まで知らなかったのは残念極まりなかった。

もう少し早くこの機体の存在を知っていれば、軽量戦術機開発に設計概念を流用する事も出来ただろう。

だがES-Xを量産する事で、使用されている技術のノウハウを蓄積できれば……。

(A T F S 計画には、まだ間に合う。上手くすれば、主契約企業に名乗りを上げる事も可能だ)

「ねえ……、だから噂って何なの？ 一体どんな噂が流れているの？」

第十八話 試験中隊始動（後書き）

実戦テスト間際、ノースロック社登場。

戦術機開発への足がかり？

感想待っています。

外伝 1 国外事情 1 1983 (前書き)

短いですが、米国以外の内部事情を書いてみました。

まだ、主人公の影響は薄いです。

EU

BETAの西進が進み、今や西欧州が主戦場になった。

各国軍は奮戦はしているが、遅滞防御を行いつつ後退を繰り返しているのが現状である。

その為BETAの軍勢は既に、ベルリンの目と鼻の先といっても良い所まで迫っていた。

軍部の予測では、年内にもベルリンは陥落すると推察されている。何とかBETAを押し返そうとECTSF計画を1980年に開始したが、BETA侵攻に伴い計画は遅々として進まない。

決定打を欠いた状態で、泥沼の戦況が続いている。

そして遂先日、決定打の一つになるかもしれない物を見つけた。

米国陸軍欧州方面派遣部隊が使用している、EML搭載車両だ。

諜報部を使って調べた所、米国で開発中の新兵器を欧州戦線で実戦テストを行っているらしいと言う事だ。

この事をEU定例連絡会の議題に上げると、議会は紛糾した。

「米国と交渉してでも、手に入れるべきだ！」

「いいや！ 此処で弱みを見せれば、米国に付け入れられる事になる！」

「馬鹿を言うな！ 此処でBETAの侵攻を食い止めなければ、付け入れられる所か国その物が無くなるんだぞ！？」

「虎の子のECTSF計画も、BETA侵攻の影響で遅々として進まない！ 現有戦力だけでの戦線維持は、既に限界寸前なんだぞ！」

議会の意見は真つ二つに分かれた。

戦線を抱える国々は、米国に譲歩してでも対BETA戦に有効な兵器を欲し。

後方支援国家は、新兵器は欲しいが米国に付け入れられ既得權益を奪われたくない。

それぞれの思惑が渦巻きながら、議会は進む。

ソ連

欧州戦線で米軍が、新兵器を投入した事を情報部が察知した。

詳しく調査を行うと、EML搭載車両との事だ。

軽車両搭載兵装で、遠距離から大型種のBETAを撃破無いし行動不能にする事が出来る。

これは驚愕に値する事実だった。

確かに米国はソ連に先んじ、戦術機等の最新兵器の開発に成功し

ている。

だが、何時の間にもここまで技術力に差が出来たのだろうか？

ソ連で同じ物を作ろうとすれば装置は大型化し、軽車両所か戦車……いや、艦船に搭載するのがよつとの代物に成るだろう。

そして出来た代物は、米国の逸れに比べて明らかに劣った物になるだろう。

日本帝国

情報省は、米軍が欧州戦線で新兵器を投入した事を察知した。

EML搭載車両……それが投入された新兵器の正体。

帝国国防省内部でも、レールガンの開発を推進し様と言う一派も存在していた。

そして彼等は、このEML搭載車両の戦果を受け俄かに活気付いた。

しかし、帝国の決定は第三世代戦術機の開発優先。

米国のATSF計画に対抗した、耀光計画を優先させたのだ。

予算が切迫している帝国としては、新規開発計画を同時に2つも動かすのは厳しいと判断だろう。

その代わり情報省には、引き続き報収集するように指示が出された。

外伝 1 国外事情 1 1983 (後書き)

国内のグダグダ事情がメインの話でした。

他の補足話も外伝で書いていこうと思います。

感想待っています。

第一九話 試験中隊の日常（前書き）

お気に入り登録1100件突破。

有難う御座います。

第一九話 試験中隊の日常

1984年9月中旬

ES-Xの評価試験は実戦テスト以外は全て終了。
大きな問題も発生せずに、無事終了した。

しかし、試験場には評価試験中以上の緊迫した空気が流れていた。それもその筈、試験中隊は半月後に迫った実戦テストに向けて連携訓練を行っているからだ。

今は、BETAの機動パターンを入力したラジコン標的を使用し演習を行っていた。

レッド小隊とブルー小隊は高速機動を維持しつつ、イエロー小隊が待機するクロスファイヤーポイントへ誘導を行う。

イエロー中隊はその間に、目標ポイントに地雷を埋設し簡易補給陣地を構築。

やがてレッド小隊とブルー小隊が標的を誘導してきた。

地雷原の設置マップは既に、イエロー小隊から各小隊に通達済み。

地雷原直前でレッド小隊・ブルー小隊は、低空短距離噴射跳躍で地雷原を回避し補給陣地に到着。

レッド小隊とブルー小隊は各自、弾薬と推進剤の補給とバッテリー交換を行う。

その間に、標的が地雷原に進入した。

断続的に響く爆発音。

立ち昇る白煙。

地を震わせる振動。

標的群が地雷原の中間地点に到達する頃には、その数を半数近くまで減っていた。

その頃になると、レッド小隊とブルー小隊は補給を完了させイエ

ロー小隊と共に配置に付く。

標的群が地雷原を突破した瞬間、3小隊は一斉に攻撃を開始した。アサルトライフルが火を噴き、マシンガン・アサルトライフルと続き。

駄目押しとばかりにイエロー小隊各機が腕部ワイヤーガンで機体を固定し、背中に装備した24連装ロケットランチャーを展開し発射した。

計96発の高性能炸薬弾頭のロケット弾が、標的周辺に満遍なく降り注ぐ。

標的に着弾した瞬間、大地が引っくり返る様な大激震が発生した。それと同時に濃密な噴煙が発生し、周囲を埋め尽くす。

各小隊は攻撃を中断し、噴煙が晴れるのを待つ。

暫くして噴煙が晴れると、一斉攻撃の跡が姿を見せた。

標的は姿を消したが、同時に演習場も開始前姿から大きく姿を変えた。

至る所に大きなクレータが発生し、地面の一部はガラス化している部分もある。

そして、演習場にサイレンが鳴り響く。

「全目標の撃破を確認。演習終了。試験中隊各機は、機体をハンガーに戻して下さい」

「了解」

「整備班はハンガーで待機。機体の受け入れ準備を」

放送と同時に、待機していた試験中隊所属の整備班が一斉に散らばる。

ハンガーではES-Xの受け入れ態勢が、急ピッチで整えられ始めた。

機体がハンガーに到着する頃には、整備班の受け入れ態勢は完了。パイロット達は機体を駐機体勢で固定後、機体を降りる。

パイロット降車後の機体には、整備班が張り付き機体整備に取り掛かる。

それを離れた所から見ながら、ローズ中尉は感慨深げに呟いた。

「整備班の連中の動きも、やっと様に成って来ましたね」

「まあな、コイツは良く考えて作られた機体だよ。慣れればこんなに整備の楽な機体、は他に類を見無いぞ？」

その呟きを聞いていた整備班班長“アーノルド・タイラー”少尉はローズ中尉に同意した。

ES-Xは基礎フレームを中心に、各部のモジュールを組み合わせる事により全体を構築する構造を採用している。

部品点数も比較的少なく、中枢部品以外は整備講習を受けたパイロットが簡易整備が行えるほどだ。

整備もモジュール単位で行え、最悪モジュール事丸々交換すれば良いと言う物である。

その後も二人は色々な意見を交換していると、今回の演習の話に触れた。

「しっかし、隊長さんよ？ 今回の演習はチトやり過ぎなんじゃ？」

「ロケット弾の事ですか？」

「ああ。地面がガラス化するって、どんな威力だ？」

「まあ、オースティンさんが作った代物ですからね……」

今回使用されたロケット弾の弾頭には、オースティンが作製した特性炸薬を使用していた。

S-11とまでは行かないが、通常炸薬の数倍の威力を発揮する。

ただ手工業的に生産している為、炸薬の製造コストは通常ロケット弾に使用されて居る炸薬の約10倍近くする。

「しっかし、あいつは威力が強すぎて密集戦で使える代物じゃ無いだろ？」

「まつ、使い方次第ですよ。今回みたいな状況なら、十分に威力を発揮してくれますよ」

「それなら良いんだが……」

タイラー整備班長の心配も、最もな事なのだ。

今回イエロー小隊が斉射したロケット弾は、着弾地点を中心に20m圏内を全て粉碎した。

もし爆発影響圏内にES-Xが存在していれば、然したる抵抗も無く粉碎される。

とてもではないが、密集戦で使えるような代物ではない。

その上発射装置とロケット弾のセットで500kg近い重量になる為、A型B型での運用は不可能。

仮に搭載したとしても、その重量故に運動性は劇的低下、そもそも動く事さえ困難だろう。

実質、ES-X02C専用の装備となる。

そして如何にC型とは言え、装備すれば運動性は低下する。

しかし、起伏の激しい不正地に置いての支援火力としては十分でもある。

「後半月……この間に出来るだけ多くの演習パターンをこなして、実戦テストに備えないと」

「まあな。機体の事は俺達に任せな、万全の体制を整えてやる」

「頼りにしていますよ、タイラー整備班長」

ローズ中尉はタイラー整備班長に、挨拶をしてからパイロット連中の集まるブリーフィングルームに向かった。

演習終了後の反省会を開く為だ。
実戦テストまで後半月と言う事もあり、反省会では積極的に意見交換が行われていた。

(全く、大した物だよ……コイツは)

ES-Xを見ながら、戦術機の整備をしていた頃を思い出す。
原隊では、F-4の整備を担当していた。

戦術機が登場し始めた頃からの担当だ。

それ故に、戦術機の整備の大変さと言う物は身に染みている。

特にF-4は、人類最初の戦術機と言う事もあり構造自体が複雑に出来ていた。

それ故に、一寸した部品の交換に腕一本分解何て言う事もあった。
それを考えれば、ES-Xの整備性の良さは言う事無い。

中枢部品の整備にこそ専門知識と技術は居るが、基本的な部分は整備講習を受けたパイロット自身が整備出来るほどだ。

現に今目の前で機体の整備をしている連中も、元は戦術機や車両の整備をしていた連中だ。

配属されて2週間ほどしか経っていないにも拘らず、中々の手並みに成っている。

この分なら、実戦テスト前には十分な練度になるだろう。

(しっかし、あのロケット弾。あの馬鹿、何考えてあんな威力の物こさえてやがるんだ?)

「ん？何か出番を逃したような気が……？」

第一九話 試験中隊の日常（後書き）

試験中隊の派遣直前の日常風景でした。

ロケット弾は、主人公の初陣に向けた親心です。

感想待っています。

登場人物紹介（前書き）

登場順に追加します。

3人追加。

登場人物紹介

ブルース・オースティン

主人公 22歳（初登場時：1980年）

幾多の異世界を裏方専属として転生してきた。

前回転生したマクロスF世界にて最終決戦時に撃墜され死亡し、何の因果かインプラントボディのまま己の搭乗機、VF-27デストロイドパック装着に搭乗したままMuv-Luv世界のL5宙域付近に出現。

自分の現状を確認した後“自分が生き残る事が最優先”と言う目標を決め動き出す。

色々裏工作をした後、現在米国のある町で工房の店主を営んでいる。

最近の悩みは、軍に目を付けられた事。

金髪碧眼の短髪、中肉中背の諜報員らしい目立たない容姿をしている。

クリステイーナ・シャーロック

工房のアルバイト兼主人公の助手 16歳（初登場時：1981

年)

ハイスクールに通う傍ら、主人公の経営する工房にて働くアルバイト学生。

手先が器用で、主人公が軽く講義した異世界技術理論を用意に理解した。

才媛と言っても過言ではない能力を發揮しているが普段の行動や言動が原因で、主人公からの印象は天然のお気楽娘と言う評価だ。

更に気が付けば、工房が国防総省絡みの極秘依頼を受注してしまった為、機密保持の観点から卒業後の就職先が凡そ決まってしまう。

金髪碧眼のロングポニーテールのスレンダー体系、可愛い系の美人と言つ容姿。

ビリー・ガードナー

射撃場のオーナー 70歳（初登場時：1981年）

元米国陸軍技術研究所所属の退役技術中佐。

主人公が製作した試作リニアライフルを見て、軍に情報を提供。主人公の悩みを作った元凶。

白髪碧眼の短髪、ガツシリとした筋肉質な体系。

イアン・マクレーン

米国軍人 26歳（初登場時：1981年）

ガードナーからの連絡で主人公の元を訪れた、米国陸軍技術研究所所属の技術中尉。

主人公の製作したリニアライフルに惚れ込み、主人公の技術力に微妙な崇拜を抱いている。

主人公と軍の連絡役も担当。

ブラウンの髪に黒目の細身体系。

グレッグ・ハワード

ジネラルエレクトロニクス社：GE社 EML開発担当者 35歳（初登場時：1983年）

GE社の上司に言われ契約交渉担当を拝命、色々有った後にGE社のEML主任開発担当者に就任。

主人公がGE社との交渉時に、何か遣らかした事に気付いている

唯一の人物。

主人公の含み笑いがトラウマ、以降は主人公に対して頭が上がりなくなつた人。

眼鏡を掛けた金髪碧眼のポツチャリ体系。

主人公と出会って以来、苦勞人のオーラが漂い始めた。

ギルバート・ローズ

米軍軍人 25歳（初登場時：1983年）

陸軍強化外骨格運用部隊から技研に派遣されてきた。

ES-X計画では、1号機の専属テストパイロットを担当。

ES-Xに惚れ込み、多少表現はアクティブだが主人公を敬愛している。

黒髪黒目で長身瘦身。

シャロン・ノエル

米国軍人 24歳（初登場時：1983年）

陸軍強化外骨格運用部隊から技研に派遣されてきた。

ES-X計画では、2号機の専属テストパイロットを担当。

ES-Xに惚れ込み、冷静な表面とは裏腹に内心で狂喜乱舞し微妙に暴走している。

アッシュブロンドの髪に碧眼、小柄のグラマー体型。 綺麗形の美人。

リーラ・エドワーズ

米国 農務省 29歳（初登場：1984年）

農務省から派遣されてきた、交渉人兼新型植物工場開発計画主任担当者。

政府内に流れる噂の人物である主人公に興味がある。

金髪碧眼、巨乳モデル体型、冷たい系の美人。

ダリル・ゴードン

米国軍人 26歳 (初登場：1984年)

陸軍工兵部隊から技研に派遣された。

ES-X開発計画で、試験中隊イエロー小隊の小隊長を務める。
配属当初、何で自分が呼ばれたのかとても疑問に思っていた。

黒髪黒目に褐色の肌。 長身のガテン系

ロブ・スタイナー

ノースロック社：NR社 ES-X開発主任担当者 36歳 (初登場：1984年)

NR社のES-X開発主任担当者。

NR社はATFS計画の主契約企業に成る為、技術ノウハウ蓄積に量産担当企業に立候補した。

もつ少しES-X計画の事を知っていればと、愚痴を零していた。

金髪碧眼の中肉中背。

アーノルド・タイラー

米国軍人 39歳 (初登場：1984年)

戦術機整備部隊から技研に派遣された。

ES-X開発計画では、試験中隊の整備班長を努める。

戦術機が登場し始めた頃からF-4の整備を担当してきたベテラン。

金髪碧眼のガッチリ体型。

第二十話 旅立ちとガラクタ弄り再び。(前書き)

今年最後の更新になります。

来年も宜しく願います。

第二十話 旅立ちとガラクタ弄り再び。

1984年10月上旬

ローズ中尉たち、試験中隊が欧州へと旅立った。

一ヶ月間の連携訓練を終え、試験中隊の実戦テストは勧められる事と成ったのだ。

この1ヶ月ほど、演習場から爆音が鳴り止む時は無かった。

しかし、今の技研は祭りの後と言う様な雰囲気である。

「……………ローズ中尉たち、無事に戻って来られると良いんですけどね」

「ああ、出来るだけの用意はしたが……………。後は、ローズ中尉たち次第だな」

今回派遣されるES-Xの武装の中には例のロケット弾以外にも、今現在使用できる技術を使ったコスト度外視の特性武装を幾つか仕込んでいる。

流石に親しい友人を、手土産無しで初陣の戦地に送り込む気は無
い。

使うかどうかは彼等次第だが、使い所さえ間違えなければ力に成るだろう。

「店長、実戦テスト期間は3ヶ月ですよ？

「ああ。その期間で、色々データ採取が予定されている。

終われば、最終量産型にデータをフィードバックして先行量産型が製造される予定だ。最もこれは、技研の技術者とNR社の仕事だけだな」

「と言う事は、店長は3ヶ月間は時間が空くんですか？」

「完全に空くと言う訳じゃないが、今までに比べれば時間は空くな」

そう、時間が空くのだ。

やっと、趣味のガラクタ作りが出来る！

今までは技研の試作品破棄倉庫に良い感じのガラクタが転がっているのに、時間が取れなく弄れなかった。

実はもう既に、目を付けているガラクタがあるのだ。

光線級BETAの出現で、開発が中止された試作艦上戦闘機F-14の基礎フレームである。

何故此処（陸軍技術研究所）に在るのかは知らないが、此れほど興味をそそる物も無い。

幸か不幸か、VF-0とVF-1の設計データは手元にある。

「それでこの間、ガラクタを房に持ち込んだんですか？」

「ガラクタとは何だ、ガラクタとは」

おいこら、クリス。

何、溜息吐いているんだ？

お前だって、ガラクタ弄りは嫌いじゃないだろ？

今回の物は今までより大きいが、基本的にやる事は変わり無いんだぞ？

「ガラクタですよ……今の段階では」

ん？

何か、変な言い回しをしたな？

「それで、今度はどんな風に弄る気ですか？ 光線級BETAが居るから、基本的に空は飛ばませんよ？」

まあ、基本はそうだよな。

地表からの高出力高精度レーザー攻撃。

これが可能な存在が現れたときから、地球の航空機技術の発展は暗礁に乗り上げた。

機動性が足りずに、航空機は単なる移動目標に成ってしまった。それ故に、戦術機と言う二足歩行機械が一気に発展した。

そんな中で、戦闘機を作ると言う様な奴はキ〇〇〇扱いされても否定出来ない。

「何も高空を飛ぶ物だけが、航空機と言う物では在るまい？」

「……？　と言う事は、低空飛行がメインと言う事ですか？」

「モット言えば、地表を高速滑走すると言えば良いかな？」

「……ああ、ホバリング飛行と言う事ですか？」

クリスも、何と無くイメージ出来たみたいだな。

図面を見せるのが一番早いのだが、今製作中だ。

V F - 0を元に、設計図面を引きなおしている。

バトロイド形態をオミットし、ファイターとガウォークのみと言う機体だ。

素材強度的に、バトロイド形態への変形機構の搭載は不可能だと言う結論が出た。

仮にバトロイド形態を搭載すると、機体強度確保の為に重量が2倍以上に成ってしまう。

この重量では、仮に飛べたとしても非武装の機体に成ってしまう。

まあ、民生用ならこれでも良いんだがな。

「正確には、ホバリングも出来る機体と言う事だな」

「VTOL機……ハリアーの後継機でも作る気ですか？」

まあ、普通はそう言う発想に行き着くな。

「いや、可変機構を組み込んで航空機に足を生やす気だ」

「……足？」

「推力偏向ノズルの発展型と考えてみる。自由に動く脚部の裏に大出力エンジン、これ以上無い機動性を確保出来ると思わないか？」

クリスは暫くの間自分の足を凝視した後、色々な角度に動かして考え込み始める。

暫く考え込んでいたみたいだが、少しすると顔を上げ賛同してくれた。

「成るほど、確かに従来機を遥かに越える機動性を確保できそうですね。でもそうになると、今度は機体の強度が足りなく成るんじゃないんですか？」

やっぱり、クリスの理解力はずば抜けているな。
話が早くて助かる。

「確かに、此の俣だと機体の強度不足に悩む事に成る。取り合えず、基礎フレームにスーパーカーボン単結晶合金複合材を組み込んで強度を確保する心算だ」

ES-Xの基礎フレームにも使用している素材だ。
コストは掛かるが、これでそれなりの強度は確保出来る筈だ。
後は機動リミッターをかければ、行き成り空中分解と言う事は無いと思う。

「それで、大丈夫なんですか？」

「計算上は行ける筈だ」

多分。

実際、VF-0もVF-1もOTM素材を使用する事を前提に作られている機体だ。

OTM素材抜きで何処までが大丈夫かは、実際に作ってテストして見ないと何とも言えない。

VF-0クラスの機動力なら、多分大丈夫だと思いたい。
まっ、作ってみたらハッキリするだろう。

(こんなの分かるか)

NR社がES-Xの量産担当企業に決定してから、約2週間。

ES-Xの製造手順書と設計資料が国防総省から渡された。

資料が届いた日は沢山のプロジェクト研究員が群がってきていたのだが、次の日からは見に来る人数が減りだした。

1ヶ月経つ頃には、主任である自分以外はこの資料を見るものは居なくなった。

研究者達曰く、俺等には無理ですとの事だ。

……誰がこうなる事を予測していたらどう？

皆優秀な研究員だったのに、その全員が設計資料の読解をギブアップしたのだ。

技術ノウハウの蓄積、これがこの開発計画に参加した目的だった。

それが達成不可能となった瞬間だった。

(確か……GE社にも彼の関った開発計画の担当者が居たよな？
今度意見交換会と言う名目で、一緒に酒でも飲みに行くかな？)

「そう言えば、ロイツのエンジンどうしよう？……あっそう言
えば、戦術機の方のF-14の跳躍ユニットの試作品が倉庫に転が
ってたな」

第二十話 旅立ちとガラクタ弄り再び。(後書き)

光線級BETAが出てくる前は、普通に戦闘機の開発が進められていたと思いますので、F-14の試作品を出してみました。

現実だとF-14は70年に初飛行で73年には運用開始しているので、光線級BETAの出現でお蔵入りする事になっても試作品位は残っているだろうと思います。

F-14の基本フレームが技研の倉庫にあつた理由としては、ATFS計画でも旧空軍勢力が次世代航空機を開発すべきと主張をしていた見たいなので、その一派が駄目元でF-14の基礎フレームを技研の倉庫に放り込んでいたと言う事になっています。

感想待っています。

第二十一話 Y F・O (前書き)

新年明けまして、おめでとございませう。

今年も宜しく願ひします。

第二十一話 YF-0

1984年11月下旬

試験中隊からの中間報告によると、実戦テストは比較的無事に進行しているらしい。

特に隊員からの欠員も無く、無事との事だ。
皆元気に遣っているみたいで、ホツとしている。

それはさて置き、工房に運び込んだF-14の基礎フレームのだが。

非破壊強度試験をしてみると、かなりの強度不足が判明した。

フレームの補強無しに、飛行中ガウオークチェンジを行うと胴体が引裂かれると予想が出た。

正直に言っつて此の仮基礎フレームに補強を入れても、実戦では使えない機体だ。

使う気なら、基礎フレームごと作り直す必要がある。

まあこいつを実戦投入する気は無いから、技術概念実証機位に成つてくれれば御の字だろう。

それと追加で技研の倉庫から放置されていた、F-5の脚部フレームとF-14の試作跳躍ユニットFE-110-GE-390も貰ってきた。

F-5の脚部フレームにも補強が必要だが、基本的な機能としては問題ない。

問題が有るとすれば、試作跳躍ユニットだろう。

FE-110-GE-390は、空力機動制御概念実証機の一つとして高出力化を限界まで追及した一品だったのだ。

その為に極めてデリケートな性質を持ち、劣悪極まりない整備性を誇っている。

設計者は本気で、実戦運用を考慮に入れて作っていたのだろうか？
お蔵入りになって当たり前の一品だ。

まあ、それと引き換えに出力だけは現用跳躍ユニットから頭一つ
抜き出している。

そんなこんなで此処暫くは、問題品を組み合わせながらYF-0
をチマチマと作っている。

その結果が、目の前にある内部機器剥き出しの姿をしたYF-0
だ。

今は工房の天井クレーンで宙吊り状態にされ、変形テストが始ま
るのを待っている。

「店長、変形テストの準備出来ましたよ」

「分かった。こっちの計測準備も大丈夫だから始めてくれ」

「行きますよ？ 3・2・1・変形開始」

クリスの合図と共に、YF-0は変形を開始した。

エンジンブロック（脚部）が下方展張し、エアブレーキとスポ
イラーが作動。

両足の逆関節が鳥脚状に屈曲し、推力偏向ノズルが展開する。

この間凡そ3秒。

変形システムのトルク出力を優先している為、VF-0より展開
時間は長くなった。

高速パルスアクチュエータかりニアアクチュエーターがあれば話

は変わってくるのだが、現状で使えるアクチュエーターだとこの速度が限界である。」

「よし、OKだ。変形システム自体に問題は無さそうだな」

「ハードとしては、これで凡そ完成ですね。制御系の方はどうするんですか？ 参考に出来る、可変戦闘機の制御データなんて過去何処にも無いですよ？」

問題はそこだ。

V Fの稼働データ事態はあるのだが、存在しない筈の物の出所を聞かれると困った事態になるのが目に見えている。

しかし、既存の航空機の制御系ではV Fの制御は極めて困難だろう事は分かり切っている。

「ファイター形態の制御系は、既存の航空機の物を流用して作れば大丈夫だろう。ガウオーク形態の制御系は……戦術機の匍匐飛行のデータを流用して煮詰めるか」

「それで行けますか？」

「まっさらの状態よりは、マシじゃないか？」

フライトシミュレーターでもあれば、楽なんだろうがな。
戦術機用のシミュレーター、技研の倉庫に置いてなかったかな？

「ところで、店長」

「ん？ 何だクリス？」

「店長って、飛行機の操縦ライセンスって持ってるんですか？」

「……」

「……」

「……」

「……ヤバ。」

そう言えば俺、此処（米国）の飛行ライセンスとって無かった。
おいクリス、そんな目で見るなよ。

オレ無免だけど、レ・ザーやミサイルやビームの弾幕を回避して
無傷で艦爆する事だって出来るんだぜ？

「ま、まゝ何とか成るさ。取り合えず、この機体を完成させな

いか？」

「は、そうですね。 此処まで作ったんだから、完成させましよう」

はあく、パイロットの件どうしよう？

今時、戦闘機を操縦できるパイロットって残ってるのか？

確か初期の戦術機パイロットの大半は、戦闘機パイロットからの
転向組みが殆どだって聞いた事が。

(やっと、この苦勞を分かってくれる人が出来た)

先日NR社のスタイナー氏から、意見交換会を開かないかと言う
打診があった。

初めはどう言う心算だと思ったが、オースティンさんの関る開発
計画の主任担当者と聞いて直に合点が行った。
そして思った。

同じ苦しみを分かち合える人かもしれないと。

私は二つ返事で、了承の意を伝えた。

そして今日、会員制の個室を備えたバーで顔合わせだ。

何と言うべきか、スタイナー氏の瞳を見た瞬間に私は悟った。

この人は、私の同志だと。

思わず手を差し出したが、スタイナー氏は何も言わずに手を握り返してくれた。

暫く手を握っていると不意に、目頭に熱い物が込み上げて来た。思わずスタイナー氏の方を見ると、彼は静かに目を閉じて何も言わないで居てくれた。

洩れそうになる泣き声を洩らさずに我慢するのに苦労したが、何とか持ち堪える事ができた。

その後は、スタイナー氏と共に酒を交えながら歓談を行った。

どうも、オーステインさんは今も色々と暴れているらしい。

出来れば、もう少し大人しくしていて欲しい物だと切に願う。

(そう言えば、来月はオーステインさんの所のニューイヤーパーティに誘われていたな)

「飛行ライセンスか……。取る時間が無いよ」

第二十一話 YF・O（後書き）

ハワードさん、スタイナーさん・・・・・・・・・・（敬礼）

オースティン被害者の会発足。

感想待っています。

第二十二話 カウントダウンパーティー 前編(前書き)

ユニーク10万突破

有難う御座います。

第二十二話 カウントダウンパーティー 前編

1984年12月末日

今日は工房に、知り合いを集めてカウントダウンパーティーを行っている。

ローズ中尉達試験中隊の面々も、つい先日欧州より無事に帰還した。

機体が破損し予備機に乗り換える事態こそ起きたが、死者や重傷者が発生しなかったそうだ。

お陰で、ローズ中尉やノエル少尉も無事パーティーに参加している。

今はクリスが、対応している。

「無事に帰ってこれて良かったです。ローズ中尉、ノエル少尉」

「有難うございます、シャーロックさん。ES-Xのお陰で、特に大きな怪我を負う事も有りませんでしたよ」

「その通りですよ。寧ろES-Xを装着していなかったらと思うと、ゾッとしますね」

どうやら、E S - Xは実戦でも役に立ったみたいだな。
全く持って良かった。

「それに、このオースティンさん特性料理の数々をこうして食べられるだけでも、帰ってきた意味はありましたよ」

おっ、嬉しい事を言ってくれるね。

クリス、次の料理が出来たからそっちに持っていってくれ。

「そう言えば破損して予備機に乗り換えた聞きましたけど、どう言う状況で破損したんですか？」

「……………」

「あれ？ 私、何か不味い事聞きました…………？」

ローズ中尉とノエル少尉が黙り込んでしまった。
報告書には、訓練中の事故と合ったが…………。

「…………えっと、その」

「…………実は、隊員の一人が例のロケットランチャーをA型に装備

して空中発射したんです」

……は？

あのロケットランチャーは、実質C型専用装備だぞ？

確かにES-Xのコネクターは全機共通規格だから、ロケットランチャー自体は装備出来る。

しかし、A型ではそもそもパワー不足で行動自体出来ない。

その上で空中発射って、何をしゃがったそのバカ？

「根本的な質問なのですが、あのロケットランチャーを装備して空中移動出来るほどの推力は、ES-Xには無かったと思うんですが？」

クリスの言う通りだ。

ES-Xには、そこまでの重量物を抱えたまま飛行する推力はない。

「それは、タイラー整備班長が試作した高速爆撃パック成る物を装備したためです」

「高速爆撃パック？」

ローズ中尉曰く。

・ロケットランチャーに大型化学ロケットブースターを括りつけ

た。

・化学ロケットブースターの莫大な推力に物を言わせ飛行する。要するに、急造FASTパックとでも言うべき物だ。

むしろ性質的に言えば、VF-O w / g h o s t に近い。

……アホだろ？

こんな代物、使いこなせると思っているのか？

ロケット弾発射時の反動は、C型が機体を固定して発射する程強烈なんだぞ？

それを空中で発射？

何やってんだか……。

それにE S I X の制御システムが、飛行中にロケット弾発射後の重量変化や姿勢制御に対応できると思っっているのか？

完全にパイロット任せの対応になるぞ？

「無茶でしょう、それは」

「ええ。事実その高速爆撃パックを使用した者は、ロケット弾発射後に空中で姿勢を崩して地上に落下しました」

ローズ中尉がため息混じりに独白する。

コメントのしようが無いだろうな。

「その落下した人は、大丈夫だったんですか？」

「ええ、幸い隊員は軽度の全身打撲程度で済みました。その代

わり、E S - Xは全身の装甲破損に駆動系の動作不良。極めつけは、基礎フレームの一部が許容値を超えた変形。廃棄寸前のほぼ大破と言う状況ですね」

その状況で良く、隊員は全身打撲程度で済んだ物だ。

飛翔中に落下という事は、大型化学ロケットブースターは稼働中だったんだよな？

加速を付けて落下しておいて、良く爆散しなかった物だ。

途中で切り離したのか？

「それで、軽度の全身打撲で済んだんですか？」

オレもクリスの疑問に同意する。

確かにE S - Xにも、衝撃緩和機構は搭載されている。

しかし、それはV Fに搭載されている様なビルを2・3棟貫いて無傷でいられるほど高性能品ではない。

精々、全力疾走中にこけた時に怪我をしない程度の品である。

ブースターで全力加速中に、地面と激突して無事で居られる程の性能は無い。

「ええ。幸か不幸かロケット一斉発射の反動が強すぎてブースターの推力を相殺してくれたお陰で、発射直後の速度的には50 km/h前後に減速していたみたいです。その後、姿勢制御不能で墜落。ブースターの燃料が切れるまで、地面を200 m程削りながら進んだ後止まりました」

うわぁ〜〜。

でも確かにそれなら、パイロット自身は全身打撲程度で済みそう
だ。

高速墜落の上に鑢掛けか……。

「……………」愁傷様です」

「はは……でもそのお陰で、E S - Xの搭乗者保護機能の安全性
実証には成りましたよ」

凄い疲れが滲み出てるな。

更に話聞くと、事故後は隊長として色々走り回ったそうだ。

予備機の使用申請から、事故を起こした隊員のメンタルケア、安
全性の確認されていない試作品を作成し装備した整備班への警告等
など。

事故後2・3日は寝る暇が無かったとの事だ。

(これは、美味しいですね〜)

テーブルに並べられる色取り取りの料理の数々。

今では貴重な天然食材がふんだんに使われている。

年末で忙しかったですが、オースティンさん主催のカウントダウンパーティーに招待されて良かった。

これを考えると、前回のパーティーに出席出来なかったのは惜しかったですね。

それにしても、今年中にES-Xの実戦テストを終える事が出来て良かった。

ES-Xの早期完成は、陸軍だけに留まらず海軍も期待を寄せていましたからね。

中間報告を受けていた国防総省の方からも、早期実用化を……とせつつかれていましたし。

年始には、試験結果の報告書を上げられそうです。

それにしても、オースティンさんと出会ってもう3年半ですか。

長い様で短い時間ですね。

会った当初は、彼がこれ程優秀な技術者だとは思っても見ませんでした。

それが蓋を開けてみるとRRにES-X。

今や戦術機研究に続く花形になるとは……全く持って凄い。

元はガラクタの寄せ集めだと言って、何人が信じるだろうなあ？

それと最近軍の高官の間では、技研の倉庫にガラクタを放り込んでおけば新兵器が出来ると言う噂が流れている。

普通なら只の与太話で済むのだが、それを事実にし兼ねない存在が技研に出入りしていると話が変わってくる。

稀にその噂を信じ、ガラクタを運び込んでくる軍高官も居る。

最近搬入された戦闘機のF-14基礎フレームも、その一つだ。

光線級BETAが出現して以来、戦場での戦闘機の価値は紙屑と

成った。

それに対して旧空軍派の軍人達は散々たる想いだろう。

A T F S 計画でも旧空軍派は、新型多目的戦闘機を作るべきだと思見している。

おそらく、何とかして空軍の復権をと冀にでも絶る心算で搬入したんだろう。

そしてその思いが通じたのか、オースティンさんがF-14の基礎フレームを工房に持ち帰ったと言う話を聞いた。

初めこの話を聞いた時は、オースティンさんも変な物に興味を持つなと思っただものだ。

しかし今夜のパーティで、その認識が変わった。

(オースティンさん……良くこんな考え付きますね?)

「あつ、キャベツの在庫がきれちゃったなあ。
畑からキャベツとって来てくれ」

おゝい、クリス。

第二十二話 カウントダウンパーティー 前編（後書き）

ES - Xの実戦テスト終了。

主人公の周辺には、妙な噂が立っています。

感想待っています。

第二十三話 カウントダウンパーティー 中編(前書き)

お気に入り1300件間近。

有難うございます。

第二十三話 カウントダウンパーティー 中編

1984年12月末日

料理も一通り作り終え、パーティー参加者に挨拶回りをする事にした。

基本的に今回のカウントダウンパーティーには、今まで開発計画に参加してきた主要な人達に声を掛けている。

不参加も居るが、凡そ声を掛けた人達は集まってくれた。ありがたいことだ。

会場を見回すと、大体数人のグループに纏って居る。

料理に夢中になっていているグループ、お酒に夢中になっているグループ、話に夢中になっているグループ。

皆がそれぞれの方法で、パーティーを楽しんでいる。

そんな中、一グループだけ異なった空気を纏っているグループがあった。

何と言つべきか、空気が澱んでいる。

会場は照明で明るい筈なのに、そこだけ濃密な黒い霧が張ってるかのごとく。

集まっているメンバーを見てみると“ハワードさん” “スタイナーさん” “エドワーズさん”の三人だった。

ハッキリ言つて、近寄りがたい。

もの凄く、近寄りたくない。

しかし、主催者と言う立場としては一度は顔を見せ無ければならぬ。

そう自分に言い聞かせながら、意を決して声を掛ける事にした。

「ようこそ、お越しくございました。御三方とも、お久しぶりです」

とりあえず、無難な挨拶を一つ。

それに反応したのか、三人はユックリと顔を上げこちらを向く。うわあ〜っ。

三人とも、目のハイライトが消えているんだけど……。

「ああ。オースティンさん」

「お久しぶりですね」

「欧州派遣前にお会いしたので、一月振りですね」

……声に張りが無い。

この時点で、物凄く疲れていると言つ無言の訴えが伝わってくる。何か話題を振らないと……。

「料理の方はどうですか？ 中々の自信作なんですが」

「以前同様、とても美味しいですよ」

「ええ、此処までの料理は滅多に戴けませんね」

「以前別のパーティーで食べた、一流レストランの料理と比べても遜色ない味ですよ」

それは良かった。

少しずつ、目のハイライトも戻り始めたな。

もう一息かな？

「そう言えば、各々の物品の量産は順調なんですか？」

「「「「……」」」」

……ヤバ、地雷踏んだ。

又、三人の目からハイライトが消えたよ。

もしかして、さっきから影を背負っていたのは仕事が上手くいってないからか？

「「「……貴方が、それを言う（います）？」」」

……あれ？

もしかして、俺が悪いの？

なぜ？

必要な技術資料は全部提出したし、解説書も添付した筈なんだけどな？

「……ええ確かに、資料は受け取りました」

「……細かい解説書も添付されていきましたね」

「……超高レベルの新理論の解説書が」

「……超高レベル？」

新理論と言っても既存の理論を一寸発展させただけで、OTM系の理論は一切添付していない筈なんだけど？

使用素材も現用品を組合わせただけで、OTM系の素材は使用していない筈。

そもそもハイスクール時代のクリスが短期間で理解したものを、一流企業の研究員が理解出来ない筈無いじゃないですか？

「アレって、そんなに難しい物ではない筈なんですけど……」

「「「「……」」」」

「……あれ？」

何で皆さん、そんなに押し黙っちゃうんですか？

え？

もしかして……解読失敗しちゃいました？

おっかしいな、そんなに複雑な物は作っていない筈なんだけどな？

「貴方方基準で難しく無い物は、我々にとっては理解し難い物な
んですよ」

「貴方方が作った物を私達だけで再現しようとする、数年から
十数年はかかります」

「オースティンさんが来る前の討論で、我々だけでは現時点での
RR及びES-Xの新型機開発は不可能だと言う結論に達しました。
また同様に、植物工場の生産コスト削減も難しいと言う事も……」

231

うわぁ〜。

初めの時より、もっと濃密な影を抱え込んだよ。

「えっと、何と言いますか……すみません」

「「「「……」」」」

うわっ、ヤバッ。

余計沈み込んだ。

特に、ハワードさんとスタイナーさんが拙い。

何か、ブツブツと小さな声で呟き始めた。

これは、今作っているYF-0は見せない方が良くないかな？
今見せると、拙い気がする。

後でクリスにも、YF-0の事は黙っている様に言い包め……。

「おおっ！ これは……新型戦闘機!？」

……今の声は、マクレーン大尉？

マクレーン大尉の大きな叫び声が、会場に響く。

慌てて会場を見渡すが、姿が身見えない。

確かさっきまで、あそこで料理を食べていた筈なのに。

あっ丁度良い所に、クリスが。

「クリス。 マクレーン大尉って、今何処に居るか分かるか？」

「一寸涼みがてらに散歩してくるって、工房の方に歩いて行くの
を見ましたよ。」

……何ですと？

もしかして……YF-0を見た？

あゝ、何か走って近づいて来る様な人影が……。

「オースティンさん、あの工房にある新型戦闘機は一体なんです

か!? 足が生えていますよ足が!」

落ち着いて下さいよ、マクレーン大尉。

はあく、タイミング悪いな。

「オーステインさん……また、何か作っただんですか?」

ハワードさん……ごめんなさい、勢いで作りました。

無言で目を逸らすと、崩れ落ちた。

もう、この状況どうしろと?

(オーステインさん。 もう……おなか一杯です)

今年一年は、本当に辛い一年だった。

モンキーモデルEMLの開発を始めたが、遅々として計画は進行しない。

途中でオーステインさんから開発指南書のような参考書もらったが、内容が高度過ぎて分からない。

オーステインさん達に開発協力を要請し様にも、別開発計画に参加しているのでそれも不可能。

色々と在ったが、それでも良い事もあった。

切羽詰った時に出会った、同じ悩みを抱えるスタイナーさんと言
う心友。

そしてこのカウントダウンパーティーで知り合った、エドワーズ
さん。

苦しみを分かち合える友が居ると言うのは、本当に素晴らしい。

しかし又、オースティンさんが遣ってくれた。

パーティーの中盤で、マクレーン大尉の叫び声が聞こえたのだ。

その叫び声によると、戦闘機に足が生えているそうだ。

戦闘機に、足って何？

又オースティンさんが、トンデモナイ物を作ったのだろうか？

確認の為にオースティンさんに問うと、無言で視線を逸らされた。

その姿を見ると、意識が遠のき体の力が抜ける。

テーブルに崩れ落ちながら掠れる視界に、同じ様に崩れるスタイ
ナーさんの姿が見えた気がした。

(もう、ゴールしても良いですよね?)

「楽しい筈のパーティーが、何でこんな事に？ ハワードさん、
スタイナーさん、エドワーズさん、起きて下さ〜い」

第二十三話 カウントダウンパーティー 中編（後書き）

お三方・・・ガンバ

もう直ぐ、新しい仲間（生贄）が追加されますよ。

感想待っています。

第二十四話 カウントダウンパーティー 後編(前書き)

お気に入り1300件突破

有難うございます。

第二十四話 カウントダウンパーティー 後編

1985年元日

マクレーン大尉を宥めた後、テーブルに崩れ落ちていたお三方を起こす。

……何だか、生気が枯れ果てた様な印象を受ける。

取りあえず後十数分で年越なので、その後に皆に纏めて説明すると言っておいた。

そしてパーティーの主目的である年越のカウントダウンを行った後、パーティー参加者を工房の方に案内した。

工房の中央作業スペースには、ガウオーク形態で駐機しているYF-0が鎮座している。

「え〜つと、これが先ほどマクレーン大尉が叫び声を上げた原因の技術概念実証用試作可変戦闘機“YF-0”です」

「……」

あれ、反応無し？

予想していた反応と違うな？

もっと、驚くかと思っていたんだけどな。

「え、この機体は従来の戦闘機を超える高機動が可能な戦闘機と言うコンセプトで作ってみました」

まだ反応が無いな。

取りあえず、説明を続けるか。

「脚部にエンジンを搭載し脚部を自在に可変させる事で、推力偏向幅をより大きく取れる様になっています。これによって、従来の戦闘機を遥かに越える運動性を得る事に成功しています」

あ、その、そろそろ反応して貰いたいかな？

「又アクティブ空力制御やVFC（渦流制御器）等を搭載し、更なる運動性の向上をはかっています」

何だか段々目を輝かせる人と、目を虚ろにさせる人に分かれてきたな。

「以上の事により、本機は新概念による運動能力向上機として試作されています」

あ、ハワードさんとスタイナーさんが崩れ落ちた。

おいおいクリス、そう攻める様な目で見るとよ。
お前も一緒に作っていたんだから、同罪なんだぞ？

「流石オーステインさんですね。まさか、このような戦闘機を開発するなんて……」

褒めて頂けるのは良いんですが、コイツはまだ未完成なんですけど？

色々欠点もありますし。

「そんなに褒められる様な物では無いですよ？ 機体強度不足や航続距離不足、未完成の制御系。何より、乗りこなせるパイロットがいるかどうか……」

この機体の最大の問題点は、調子に乗って運動性を向上させすぎた事だ。

設計上では無装備ならVF-19クラスの運動性は無理だが、VF-9クラスになら何とか片手が掛かる位の運動性を持っている。もつとも、その運動性を発揮するとYF-0の機体強度だと空中分解するが……。

「いえ、それでも大した物ですよ。この機体は無用の長物に成った戦闘機に、復活するかも知れない可能性を示したんですから」

そこまで評価される代物か？

機動性は兎も角、防御面が紙過ぎるんだが？

ピンポイントバリア所か、エネルギー転換装甲や対レーザーコーティングさえも施されていないんだが？

下手をすれば、対空砲を一発でも食らえば落とされるんだが？

「そんな物ですかね？」

「そんな物です。それと、テストパイロットの件は任せて下さい。私が話を通して、確保しておきますから」

話を通すつて、又国防総省に開発計画を提案する気なんですか？
やっと、ES-X開発計画の終わりが見えて来たのに又……。

「いや、別に無理して飛ばさなくても良いんですが……」

「何を言っているんですか、オースティンさん。こんな素晴らしい物が有るのなら、絶対に飛ばすべきですよ！」

ああ、マクレーン大尉のテンションが振り切れてる。

何と言つか、もうマクレーン大尉の中では飛ばす事は決定事項なんです……。

なあクリス、何とかマクレーン大尉を止めてくれないか？

暫くは、ユックリとガラクタ弄りをしたくないか？

え？無理、諦める？
やっぱり……。

「……分かりました。パイロットの件、お願いします」

もう諦めたよ。

何だろ……マクレーン大尉が工房に来る度に、面倒な依頼が舞い込む様な。

マクレーン大尉……出入り禁止にした方が良いのかな？
無理だろうな。

(何だろうな……もう疲れ切ったよ)

オースティンさんに誘われてカウントダウンパーティーに参加したのだが、心底疲れた。

確かにパーティーに並べられている料理は、どれもこれも逸品揃いのラインナップ。

並べられて居る酒も、今では貴重品とされる銘柄が幾つか有る。初めは忙しい日々を一時的に忘れさせ、楽しませてくれる時間だった。

しかしそれ以上に、疲れるサプライズが発生。

足が生えた戦闘機って何？

ハワードさんの問いかけにオースティンさんが無言で目を逸らした瞬間、ハワードさんが崩れ落ちる。

私も力が抜け崩れ落ちたが、ギリギリ意識は保った。

……もう、勘弁して下さい。

何とか持ち直し年越のカウントダウンが終わった後、パーティー参加者全員で工房に移動した。

確かにマクレーン大尉の叫び声通り、戦闘機に足が生えていた。

……意味が分からない。

普通に戦闘機で良いじゃないですか？

何で、新ジャンルの兵器を作るんですか？

その後、オースティンさんが、技術概念実証用試作可変戦闘機“YF-0”の説明をされた。

曰く、エンジンを脚部に搭載し、より推力偏向幅を大きく取り運動性を向上させた。

曰く、アクティブ空力制御やVFC（渦流制御器）等を搭載し、更なる運動性の向上もはかっている。

どうやら、YF-0は徹底した運動能力向上機として作られている様だ。

オースティンさんの説明を聞き終わると、体から力が抜けて崩れ落ちる。

先程は何とか持ち堪えたのだが、流石に二回目となると無理だった。

掠れる視界の先に、崩れ落ちたハワードさんの姿が見えた。

（ハワードさん…… 疲れましたよね。 私も疲れました。 何だかとても眠いです）

「YF-0を技研に？ ええ、別に持って行くのは良いですよ。でも、技研には滑走路無いですよ？ 飛行テストはどうするんですか？ えっ？ 飛行テストの時は、エドワーズ空軍基地の一区画を借りる？」

第二十四話 カウントダウンパーティー 後編（後書き）

スタイナーさん・・・ナム。

ハワードさんと一緒に飲んで忘れちゃってください。）一時的に・
・）

次回はYF・0の一回目の評価試験です。

感想待っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4277p/>

MUV-LUV ALTERNATIVE5（改）

2012年1月10日06時11分発行